九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドとチボーデの対話 : 1927年の往復書簡

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/6632405

出版情報：Stella. 41, pp.1-42, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l’Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：

ジッドとチボーデの対話*)
――1927年の往復書簡――

吉　井　亮　雄

旧師ベルクソンの思想に深く影響を受け,「内面の持続(デュレ)」を追究したアルベール・チボーデ（1874–1936）は，シャルル・デュ・ボスやジャック・リヴィエール，ラモン・フェルナンデスらとならぶ両次大戦間の代表的な批評家としてつとに名高い。青年期の詩作をへて，やがて文学批評・政治評論に健筆をふるった彼の著作は，30冊ほどの単行書をはじめ，新聞・雑誌に発表された約1,200点の評論・書評など，まさに膨大な数量にのぼる[1)]。構造主義，ヌーヴェル・クリティックの隆盛にともない，一時はその伝統的・正統的なアプローチゆえにややもすれば過小に評価されがちであったが，驚異的な博識と類い稀な洞察力に支えられた作品解釈・作家理解はいささかも古びてはいない。じじつ，この批評家への関心は今世紀に入りとみに高まっている。とりわけ2007年には，季刊研究誌『リテラチュール』が特集号を組み，また『新フランス評論』誌掲載の評論・書評を集めた『文学にかんする考察』，政治評論を纏めた『政治にかんする考察』という，合わせて3,000頁近い2冊の論集がアントワーヌ・コンパニョンの手で編まれ（前者はクリストフ・プラドーとの共編），チボーデ再評価の動きを強く印象づけた[2)]。またこれと相前後して2006年には，ミシェル・レイマリーによる本格的な評伝『アルベール・チボーデ，内部の〈アウトサイダー〉』が公刊されている[3)]。

チボーデのアルシーヴは大半が早くに散逸したが[4)]，そのためジッドが彼に宛てていた書簡にも欠落・遺漏が少なくない。筆者が承知するかぎり，チボーデ書簡26通にたいし，ジッド書簡は14通しか保存が確認されていないのである。こういった数量の不均衡にくわえ，往復信のほとんどが未だ活字化されておらず,『新フランス評論』を創刊し両次大戦間のフランス文学を主導した大家と，同誌の常設欄を四半世紀にわたり担当した批評家との交流の諸相は必ずし

も詳らかにはなっていない。かかる空隙を幾分なりとも埋めるべく筆者はすでに，両者の関係が始まった 1909 年から大戦後 1921 年までのチボーデ書簡 12 通（同時期のジッドの残存書簡はわずかに 2 通のみ，しかもその所在や具体的な記述内容は不詳）を補説を添えて訳出・紹介しているが[5]，本稿ではこれに続くかたちで，彼らの文通が相対的に頻繁であった 1927 年に的を絞って，当時の遣り取りを実証的に考察・確認したい。

『新フランス評論』に依る活動をつうじてジッドの知名度は格段に高まるが，それでもまだ 1910 年代は彼を論ずる記事や書評の内容はおおむね文学の領域にとどまっていた。だが大戦終結後は，作家の姿勢にたいする賛否両論の厳しい議論が繰り広げられはじめる（とりわけ同性愛弁護の書『コリドン』と赤裸々な回想録『一粒の麦もし死なずば』の公刊がこの傾向に拍車をかける）。当然のことながら，彼を評する媒体もそれまでのような文芸紙誌ばかりか，広い読者層を対象とする一般紙誌へと拡大してゆく。その結果として，1920 年代には文学的・美学的な紹介や評価記事と，思想的・倫理的な，場合によっては党派的な論評・批判とが急速に混在してくる。別言すれば，この時期にいたってジッドの存在は名実ともに社会全体の「事象」となったのである。

かたやジッドに乞われて 1912 年以降『新フランス評論』で常設欄「文学にかんする考察」を担当していたチボーデの執筆・出版活動も 1920 年代に入るといっそう勢いを増し，単行書だけでも『フランス生命の 30 年』3 部作（1921–1923）や『トゥキュディデスとの遠征』，『ギュスターヴ・フローベール』初版（1922），『ポール・ヴァレリー』，『作家の内面』（1923），『ロレーヌの君主たち』（1924），『小説の読者』（1925）などが矢継ぎ早に公刊されていた。

このような両者が 1927 年に交わした往復信を通覧するにあたり，後続分への補説をかねて，まずは前年末に発信されたチボーデ書簡の訳出・紹介から始めることにしよう。

*

1926 年の秋，ジッドは手書き原稿のファクシミリ掲載を売り物としていた隔月刊文芸誌『自筆原稿』（ジャン・ロワイエール主宰）に「『地の糧』新版のための未刊の序文」を発表する（9–10 月号）[6]。新たな考察によって同書の「重要性を要約」せんとするこの序文を読んだチボーデは，11 月 6 日付で長大な

ジッド宛書簡を綴り，それをまず『自筆原稿』に委ねたが，掲載号（翌年 1－2 月号）の刊出に先立つ 12 月半ば，今度は作家本人に事前の報告をかねて次のように書き送っている――

《書簡 1・チボーデのジッド宛》[7]

トゥールニュ，〔1926 年〕12 月 14 日〔木曜〕

親愛なるジッド

〔…〕ひと月ほど前にあなた宛に長い手紙を書きましたが，間違いなくあなたは受け取ってはおられません。というのも『自筆原稿』誌でのファクシミリ掲載用にロワイエールに送ったものだからです。それはあなたが『地の糧』に新たに付された序文への返答，反駁者ではなく，ひとりの読者，ひとりの友人からの返答です。私は同誌に毎号，友人たちへの手紙，当然のことに〔フランシス・〕ジャムが描く筆相学的人物像のような自筆ものを載せねばならないのですが，まずはすすんであなた宛の手紙から始めたという次第[8]。〔それにしても〕あなたとはかくも遠方から，かくも偶（たま）にしか語り合う機会がないのはなんと残念なことか！ しかしながら来夏がもっと長い出会いの好機となることを常々願っております。

〔3 年前に亡くなった〕バレスが回想録（メモワール）を書き始めていれば，きっとシャトーブリアンの回想録〔『墓の彼方の回想』〕に並ぶものとなっていたように，『一粒の麦〔もし死なずば〕』はまさにルソーの『告白』に比肩する作品であると存じます。私は事あるごとにその旨をジュネーヴの人々に断言していますが，彼らは実に興味深い反応を示してきます。敬具

アルベール・チボーデ

書簡後段で言及されるジッドの自伝『一粒の麦もし死なずば』（以下，引用文中をのぞき『一粒の麦』と略記）は，極少部数の私家版（1920–21 年）の後，作家が意を決して世に問うた普及版（オランダ紙刷り 550 部，普通紙刷り 5,500 部の 3 巻本）のこと。1924 年の刊年表示を付されているが，実際の出来（しゅったい）・発売はこの年の 10 月である。おそらくチボーデは献本を受けていたのだろう，翌 27 年 1 月には以前から時折寄稿していたイギリスの月刊文芸誌『ザ・ロンドン・マーキュリー』に「フランスからの手紙――ジッドの自伝」と題する報告記事を発表することになる（『一粒の麦』をめぐる具体的な遣り取りは後述）。こういったところを簡略な前置きとして早速 1927 年の文通に話を移そう。

同年のジッド書簡のなかには今日まで現物が未確認のものが数通混じるが，チボーデの往復信との対応関係を視覚的に捉えやすくするため，これらもまた両者の残存書簡と同様のかたちで挿入・立項しておこう（ただし識別のため記

番には *bis* を添える)。1927 年最初の書簡がまさにその一通である――

《書簡 1 *bis*・ジッドのチボーデ宛》
1927 年 2 月 10 日頃，おそらくはパリで投函。スイスでの再会可能性に言い及んだ書簡の一節に応えて，チボーデの 12 日付返信は「あなたが期待を抱かせてくださるように」という文言で始まっている。また，『一粒の麦もし死なずば』への言及，ならびに『自筆原稿』誌掲載予定のチボーデ書簡にかんするなにがしかの問い合わせが記されていた模様。

記述内容の幾分かはチボーデの返信から窺い知れるので，補説は後に回して，まずはその全文を掲げよう――

《書簡 2・チボーデのジッド宛》[9]

レ・ルース，〔1927 年〕2 月 12 日〔土曜〕

親愛なるジッド

あなたが期待を抱かせてくださるように，この春にジュネーヴでお会いできればとても嬉しく存じます。私がヴァカンスをとる 3 月 20 日から復活祭の週までではなく，また大半をスペインで過ごす 5 月でもないことを望んでいます。お互いの予定がうまく合い，3 月前半か 4 月後半にあなたのご都合がつくならば，それにこしたことはありません。

『一粒の麦もし死なずば』は読者たちからハイレベルな意見（批判のことではありません）を多く呼び起こしましたが，いずれにせよ，ご本の題名はその豊かな内容に見事に合致しています。時間が必要です。種が蒔かれ，あなたの白い 3 粒の種〔3 巻本に因んだ表現〕が発芽・成長し，穂をつけるのを待たねばなりません。かかる書物が反発を惹きおこさぬなど考えがたいことです。〔したがって〕土塊を砕くまでは土塊に守られねばなりません。ご本に感嘆するあまり，私にはこれ以上のものは望みようもありません。しかしご本の今後の行く末についても，〔反発・批判とは〕別なものであれと望んでいるわけではありません。そういう点では私はバーのマスターのごときもので，何でもござれなのです！

ロワイエールの雑誌を介した自筆の手紙であなたに申し上げたことはほとんど覚えておりません。この種の書き物の面白みは，文通者と用箋にのみ語りかけながら筆を走らせることです。〔たしかに〕ほかにもすべきことはありましょう。つまり字句の削除を巧みに用いること。別の機会なら私もそれを考慮するところでしょう。いずれにせよ私は，あなたにまさに話しかけるように手紙を書いたのです。

先日サン＝セルグでジャン・シュランベルジェの息子〔マルク〕と会いましたが，父はじきに来ると言っていました。私は明後日，ジュネーヴで我らが友〔ポール・〕デジャルダンに会いますが，彼は〔ヨハン・ハインリヒ・〕ペスタロッチの没後百年を機にスイスを回るつもりのようです[10]。ジュラ山中の雪原であなたと再会できれば

と存じます。あなたがユリアン〔1892年執筆，翌年5月刊の『ユリアンの旅』〕の時期に愛した地であり，またいつの日にか，形而上学的な高みを純化・繊細化すべく再訪なさるだろうと思うからです。

近いうちにお会いできましょう。敬具

アルベール・チボーデ

ここでは，第2段落中『一粒の麦』の記述について若干の補説を添えておこう。これは先に言及した『ザ・ロンドン・マーキュリー』掲載の書評にからむコメント。ジッドはすでに数日前（2月10日頃），書評の切り抜きをおそらくはチボーデ本人の依頼のもと，『新フランス評論』の編集長ジャン・ポーランから送付されていた。すなわち当該の一節は，論評対象者の読後感を想定・意識したうえでの発言なのである。では『一粒の麦』はどのように評されていたのか。チボーデは「純粋に文学的観点から判断すれば，『一粒の麦』は現代的自伝の傑作のひとつ，いや，まさに傑作そのもの」と断言する。そのうえで，ジッドがこの普及版発行によるスキャンダル招来を覚悟するのに2年の歳月を要した点をとらえ，最終的な態度決定の背景として，性現象にかんするフロイトの理論が一般に浸透しつつあったことを喚起している。また，幼少年期および青年期の回想がかくも赤裸々に綴られたのには，以後 30有余年の経過にともなう体験の距離化・対象化にくわえ，少なからぬ関係者の死もまた関与的であった旨。さらに論者が言うには，『一粒の麦』が語る行為は信憑性の点でもはや現在のジッドのそれとは別物であり，仮に彼が今日まで自伝を書き続けたとすれば，もはや当時の「率直さ（フランクネス）」をどこかで諦めざるをえまい。本書はそうした通例・慣習を排しえていたがゆえに，まさにルソーの『告白』に比肩する作品となったのである，云々[11] ……。

さて，ようやく件（くだん）の『自筆原稿』誌が出来（しゅったい）し，ジッドが3カ月前のチボーデ書簡を読み知るのはちょうどこの頃のこと。当該書簡は『地の糧』に新たに付された序文への返答，チボーデ自身が述べていたように「反駁者ではなく，ひとりの読者，ひとりの友人からの返答」であった。長大なうえに論述はうねるように展開し，他作家・他作品への言及も頻出するので，手短（てみじか）な要約は容易でないが（稿末に補遺として示した日本語訳を参照[12]），とりわけ彼が力説するのは，ローマのエレゲイア詩人で初代エジプト総督のガルスになぞらえての「空白」の美と，その「空白」ゆえに成立する「先へと継続してゆく生（vie à suites）」

の意義・重要性であった。そしてその指摘に立って，かかる特性こそがジッドの生き方・作品を秀でて価値あらしめていると結論づけるのである。このような「持続」の価値の強調は，いかにもベルクソン信奉者のチボーデならではの主張であった。

同じ2月，チボーデは『ジュネーヴ評論』誌に「批評における構築」と題する論文を発表している。古典主義以降の批評の流れを跡づけた研究だが，論中ひとつの指摘がとりわけ強くジッドの関心を惹く。『エセー』の版は17世紀半ばまではほぼ2年ごとに出ていたのに，1669年からの56年間は新版の刊出が絶無という「大空位期」の指摘である[13]。論文を読んでさっそく筆を執ったジッドは批評家の慧眼に賛辞を送るが，同時に『地の糧』序文の話題にも触れ，その執筆意図，ならびに「売り上げ不振」の効用（当初の「不成功」はむしろ将来に評価を委ねるための奇貨なり）を説明・強調している（ジッド独特のこの考え方は後に『贋金つかい』をめぐっても議論の対象となる〔《書簡7・8》参照〕）――

《書簡3・ジッドのチボーデ宛》[14]

〔パリ，19〕27年2月18日〔金曜〕

親愛なるチボーデ

あなたが先頃『ジュネーヴ評論』誌に発表なさった実に見事な論文を大いなる関心をもって拝読しました。導入部において，フランス古典主義の姿を際立たせることを目的に，1669年から1724年までのモンテーニュ〔『エセー』新版刊出〕の空隙，欠落を確認しておいでですが，そのご指摘にたいし私の精神はある種の魅惑，明白な事実の魅惑にうっとりさせられます。本当にあなたには退屈することがない。私はあなたのものほど鮮やかで精神を高揚させる批評を知りません。

まさにロワイエールの雑誌に載ったあなたの長い手紙のお礼を申し上げようとしていたところです。私のほうでも最初は同誌に掲載するかたちで礼状を差し上げようと思いましたが，（数行もあれば充分に示せる筆相学的な特徴のほかに）かかる自筆出版がどのような固有の興味を提供できるかを探りながら，このたびのプライベートなお手紙が指摘するように，それの与える興味として私が認めるのはただひとつ，字句の削除だけにかぎられます。だからロワイエールに原稿を渡すにさいし私は，表現の彫琢，思考の逡巡や示唆，「修正の跡（ルバンティール）」などをすべて追えるようなページを念を入れて探すことになるでしょう。それこそが〔自筆ものという〕このジャンルの，規則とは言えぬまでも，少なくとも承認するところだと思われます（さもなくば，活字に組めばはるかに易しくなる読みを読者に強いて何になるというのでしょう）。たとえば今綴った最後の文はかなり繋がりが拙いので，削って書き直したい気が大いにします。しかしあなたご自身が私にお書きになっていたように，筆の流れにまかせて一気呵成に書

くことにいたします。

修正ないしは指摘をいくつか申し上げます。まずは私の〔『地の糧』新版用の〕序文について。それを書くにあたり私は版元メルキュール〔・ド・フランス〕の売り上げ明細を見直したわけではありません（この明細は好事のネタとして，また若き野心家たちへの教育的配慮から，近々再版する『地の糧』に付録として載せます）。10 年間で売れたのはちょうど 500 部であって，最初に記したような 100 部ではありませんでした[15]。しかし売れ行き不振であることに変わりはありません。かつてそのことでなにがしか辛さを感じたとしても，否，今そのことを苦々しい思いで語っているとは考えないでいただきたい。そんな素振りを見せることさえ遺憾とするところです。私にとって重要であり興味ぶかく思われるのは，拙著のうち今日では最も売れる同書が「完売する」のに 25 年を要したという点なのです。そして逆に，このきわめて緩慢な売り上げ増ほど将来を安んずるものはない，そう思われるのです。苦い気持ちを抱かせるとすれば，それは過大に評価され宣伝や流行・仲間褒めによって一時的に成功する本すべてに言えるように，次第に売り上げが落ちてゆく場合でしょう。思うに私の著作はすべて多少なりとも『地の糧』と同じ経緯をたどったのです。〔メルキュールの社主アルフレッド・〕ヴァレットは 2,000 部印刷の必要など考えもせず，紙型も取りませんでした。また，たとえ座席が埋まらずとも『サウル』が 2 年続けて上演されていたら，おそらく今日では当たりをとっていることでしょう。しかしそれこそが以後，私が芝居を止めてしまった理由です[16]。ただちに大成功をおさめるべきなのに，私はいつも将来の勝利にむけてただ待機するばかりだったのです。

ガルス〔的なる存在〕……著作と著作のあいだの空白，〔にもかかわらず〕「先へと継続してゆく生 (vie à suites)」についてのご高説のなんと見事なことか。そしてペトリュス〔・ボレル〕の再来たるロートレアモン[17]…… これについてはまた近々ジュネーヴでお話ししようではありませんか（1）。たとえそれが我らの友人 F たちのところであったとしても[18]，あなたとはパリでよりはむしろ彼（か）の地で再会いたしたく。敬具

アンドレ・ジッド

（1）そう，4 月後半ということになりそうですね。あなたとお話しできるとはなんと喜ばしいことでしょう！

こののち 4 月の下旬には，かねてより望まれていたスイスでの面会が実現する（ただし場所は，当初想定されていたジュネーヴではなく，各地を経巡る 1 カ月間のスイス旅行でジッドが最初に投泊したローザンヌ）。満を持しての面会では，ふだん頻繁には会えぬふたりだけに，上掲書簡で上がった話題をはじめ，様々な事柄について親密な会話が交わされたことは想像に難くない[19]。

その後，夏までの 3 カ月，両者の文通は確認されていないが，この間（かん）のジッドの活動を略記しておけば，5 月半ばパリに帰着，翌 6 月には『コンゴ紀行』を

出版，引き続き『チャドから還る』の執筆を開始している。また日常生活において特筆すべきは，オートゥイユ（現在はパリ 16 区）の屋敷「ヴィラ・モンモランシー」から 7 区ヴァノー通りのアパルトマンに転居し，ヴァン・リセルベルグ夫妻の隣人となったこと。ジッドと夫妻は隣接する壁を改造，そこにドアをつけて 2 世帯が容易に行き来できるようにし，毎日のように食事をともにするほどの間柄となった。とりわけ妻マリアの『プチット・ダムの手記』の大半はかかる環境から生まれたもので，身近で生活する作家の日々の言動をなんと 30 年以上にわたって，しかも当人にはまったく気づかれることなく書きためたのである[20]。エッカーマンの『ゲーテとの対話』にも比すべきこの膨大な記録が第一級の同時代資料となったのは周知のとおり。かくして，ここヴァノーのアパルトマンがジッドにとって終の住処（すみか）となるわけだが，いっぽう妻のマドレーヌはカルバドスの所有地キュヴェルヴィルを離れず，稀に上京するさいもサン＝ラザール駅近くに宿をとるのが常となる。作家自身の生活様態のみならず，夫婦の関係においても大きな意味をもつ転居であった。

7 月に入り，『パリ評論』誌に掲載予定のチボーデ論文「アンドレ・ジッド」の校正刷（同誌編集長マルセル・チエボーから送られてきた「冒頭部」の校正刷）を読んだジッドは，叔父シャルルにかんする記述について論者本人に異議を唱える。以後しばらくの文通はこの話題をめぐって交わされるが，実際に書簡を読み進めるに先立ち，8 月になって当該事案が進展した時点でジッドから話を聞いた先の隣人マリアが残した証言を紹介しておこう――

> ジッドはスイスでチボーデに会った。チボーデは一連の人物論（ポートレート）の執筆を依頼されたこと，そしてジッドの人物論を書くつもりであることを彼に告げた。原稿を依頼した〔マルセル・チエボー〕は，ジッドに会って，チボーデの論文は好意的なものですが，〔印刷前に〕その本刷をお見せしますと申し出ていた。だが〔実際の〕論文ではかなり唖然とする描かれ方だったのだ！ ジッドはまず自分の性格を解く鍵のひとつが叔父シャルル・ジッドにたいする憎悪だと告げられるのである！〔…〕あまりに突拍子もない話なので，これはいったい本当なのかと私には思われた。まさしくチボーデの巧みな弁舌に乗せられると，どこに連れていかれるか分かったものではない。ジッドはすぐに彼に手紙を書いて，自分が心から尊敬する 80 歳の老人にたいし，このように不要な打撃を与えることのないように，または少し節度をもった描き方をしてくれるように伝えた。チボーデは，拙稿は修正の必要があります，要するに私はどこか自分自身に語りかけるような調子で書いてしまったのです，と非常に丁寧な返事を書いて寄こし

たのである。〔8月9日の記述〕[21)]

ここでマリアは，ジッドの話に出たはずの2つの論文（『パリ評論』誌の予定稿と，同時期チボーデが準備中であった小論「ジッドとフローベール」[22)]）を混同し，編集者の名を取り違えているが，そのことをのぞけば事態は彼女の証言どおりに進んでゆく。

それでは引き続きジッドとチボーデの遣り取りを紹介していこう。まずは保存が確認されていないジッド書簡の立項から――

《書簡3 *bis*・ジッドのチボーデ宛》

1927年7月22日頃，おそらくはパリで投函。『パリ評論』誌に掲載予定のチボーデ論文の冒頭部を読んでの異議申し立て。またチボーデの後掲《書簡5》によれば，この書簡には次の一節が記されていた――「デカルトにたいする〔フランス・〕ハルスの嫌悪，ルナンにたいする〔レオン・〕ボネの嫌悪，〔イポリット・〕フランドランの反ナポレオン主義をあえて話題に出されるおつもりなのか」。さらにアルフレッド・ジャリなどにも言及した模様[23)]。

この間（かん）の事情を要すれば，ジッドは『一粒の麦』のなかで，自分と従姉マドレーヌとの結婚を危惧した叔父シャルルが母ジュリエットに宛てた昔の手紙を引き，「引用は原文どおり」の旨を付している[24)]。この註記を「不注意」「無礼」ととらえたチボーデは，論文の校正刷段階で，叔父にたいする甥の「憎悪・嫌悪」を指摘していた。だがそれはジッドにはとうてい受け容れがたい断定だったのである。次は，異議申し立てを受けたチボーデが取り急ぎ返した校正刷修正の通知――

《書簡4・チボーデのジッド宛》[25)]

トゥールニュ，〔1927年〕7月25日〔月曜〕

親愛なるジッド

あなたがお読みになった校正刷はただ草稿をそのまま活字に組んだものです。修正を施しましたが，これらの修正は大いに気に入っていただけると確信しています。あなたがショックを受けられた箇所は削除したか，相当に手を入れました。とりわけ叔父上にかんしては，私の考えの核心をなす部分，すなわちあなたとこの「経済人（ホモ・エコノミクス）」の気質の違いと，〔ジッドという〕あなたの名こそは経済学者の名だと強く示唆する逆説〔との両義〕のなかで，同氏を悲しませることのなきよう――そんなことは滅相もないことですが――，すべてをうまく差配しています[26)]。

拙稿全体を再読したところですが，それが提起しているいくつかの問題について

我々はいろいろと友好的に論じ合うことができるだろうと思います。自分自身に向けて語っているにすぎぬ下書きの原稿によって確定稿の是非を判断しないでください。

残念ながらお手紙からはあなたがどこにおいでかが分かりません。発信地の記述が皆無だからです。校正刷がお手元にあるということは，パリにおいでなのでしょう。あなたは頻繁に旅行なさる方なので，もしかの場合に備え申し上げておきますと，私は土曜にオランジュに向かい，舞台上演中は土曜から火曜まで〔ヴォークリューズ県〕カルパントラのホテル・デュ・クールに滞在します[27]。そこからスイス，アエシはトルヌ湖畔（というよりはその山沿い）の〔作家・美術史家ダニエル・〕ボー＝ボヴィー宅を訪れ，そこで彼や〔写真家フレッド・〕ボアソナ[28]とともに9月のオサ山・オリンポス山への旅行を準備しなくてはなりません。この行程のどこかでお会いできれば素晴らしいのですが。

拙論は8月15日に出ると思います。あなたが不愉快な思いをなさることはないと確信しています。私があなたに抱く尊敬と友情の念が如何なるものか，おそらく正確にはご存じありますまい。どのようなものか次第に分かっていっていただけるならば，それに勝ることはありません。敬具

アルベール・チボーデ

翌日にはふたたびチボーデから来信。この長文書簡の冒頭では今いちど『パリ評論』誌の予定稿について補足的な弁明がくわえられる。ジッドと叔父との関係について「憎悪・嫌悪」の感情を中心にすえた短慮を詫び，また続く3つの段落では，ジッドとフローベールとを比較・考察するにあたり「ブルジョワ嫌悪」に焦点を当てていた理由を縷々説明する――

《書簡5・チボーデのジッド宛》[29]

トゥールニュ，〔1927年〕7月26日〔火曜〕

親愛なるジッド

ご懸念の点について安心していただこうと，あなたのお手紙に返事を差し上げたところでした。自分にかんする論文を読む作家にではなく，〔あなたという〕個人（オム）に宛てて再度筆を執ることをお許しください。お手紙は次の点で私には喜ばしいものでした。つまり，お手紙によってあなたが叔父上とは不仲ではなかったことが分かった点です。叔父上を存じ上げませんが，その数多い著作には感嘆しております。もちろんあなたの著作にたいする感嘆の仕方とは異なりますが，結局お二人はともに同族の資質，すなわちフランス的な優雅かつ正確・明晰な文体，意識的な理論や文章法を身に備えておられる。ただ鷲をもった者同士ではありますが（プロメテウスを想起されたし），その鷲が同じ鷲ではないということなのです。そこで私の興味を引くのは，カドゥケウスの2匹の蛇のように，自然は同一領域に敵対はするが相補的でもある鷲を生じさせるという考えです。「嫌悪（メプリ）」というのは間（ま）の悪い言葉でしたが，ご覧のように私はそれをただ有意義であり，知的に対立するものとして使っていたのです。しかしご本〔『一

粒の麦』〕のいくつかの文章は善良な読者を過つ怖れはないでしょうか。率直に申し上げると，叔父上に敬意を抱く私が困惑した唯一の文章とは，ご本のなかにただひとつ登場する叔父上の手紙の数行を引用なさる箇所であり，そこであなたは不注意にも「原文のママ」と補っておいでなのです。それが甥の無礼な註記でないことを私がよく知るのは，あなたのお手紙を読んだ後だからにほかなりません。しかし他の人々はどうでしょうか。どこか悪意があるように受け取られかねぬことをお認めいただきたい。同時に申し上げたいのは，私の周囲で強く非難された本の内容のうち，それがただひとつ私を困惑させた点だということです。しかし，まさに私を困惑させたのはその点だけだったので，奇妙というべきこの例外は誤解によるものであること，また，あなたがただ間の悪い引用をなさったにすぎないことがよく理解できます。〔引用を受けて〕私は「憎悪・嫌悪」という語を用いてしまい，あなたの「原文のママ」という記述が私の頑なさの元となってしまった。なんとも奇妙な発端でした！

次のように私に問うとき，あなたは少々誇張しておいでです――「デカルトにたいする〔フランス・〕ハルスの嫌悪，ルナンにたいする〔レオン・〕ボネの嫌悪，〔イポリット・〕フランドランの反ナポレオン主義をあえて話題に出されるおつもりなのか，と。失礼！ 数多の才能のうちには風刺画家の才能といったものがありますが，しかしそれはなんら彼ら本来のものではありません。あなたは『法王庁の抜け穴』『贋金つかい』の作者ですが，ノルマンディー人たるあなたのフローベール的傾向が『ブヴァールとペキュシェ』的な作品を生んでいます。〔ところで〕フローベールの優越性は畢竟，彼が愚か者たちを愛し，頭のなかでは彼らとともに暮らし，彼らのうちに自らを認めていたことであり，ブヴァールやペキュシェになる傾向をもち，このふたりが自分の頭脳とまでは言わぬまでも，少なくとも自分の両足であると感じていたことでした。〔しかしながら〕あなたが描く愚か者たちの見事な肖像にはかくのごとき露骨なまでの慈愛は微塵もなく，あなたが読者に分かち持たせたいと望むのは嫌悪感にほかなりません。あなたの〔『法王庁の抜け穴』の登場人物〕フロリッソワール……，あなたの〔『一粒の麦』の登場人物〕バヴルテル……。

ブルジョワにたいする嫌悪は芸術家にあっては自然かつ必要な感情ですが，この感情は表には出て来ず，ただ芸術家がもつブルジョワ的知性を掻き立て増幅させる役しか果たさぬことがあるものです。30年もすれば「フローベールおよびジッドにおけるブルジョワ嫌悪」が学部の論文課題となることでしょう。ブルジョワにかんする調査・探索はフローベールのほうが上でしょうが，ブルジョワへの嫌悪はあきらかにジッドのほうが強い。〔だから〕ブルジョワ，プチ・ブルジョワはジッドに理解されるより，フローベールから嫌悪されるほうがましなのです。あなたと彼は，ふたりの薬剤師を相手に戦っています。しかしフローベールがオメーの客たちを逃すことはありません。その反対です。私チボーデは薬が必要となれば，すすんでオメーのところに行き，彼と会話します。多くの点で意見が一致し，ともに店の奥に入り薬用酒を一杯やることでしょう。そしてフローベールが通りかかったら彼を呼び止めるのです。しかしそれがフルリッソワールだとしたら！ 煎じ茶一箱のためでさえ彼のところには行きたくも

ありません。この不幸な男はただくたばってしまえばよいのであり，彼を抹殺し，そうすることで父親つまり自分の創造者ジッドの考えへと至るラフカディオの行為ほど論理的かつ必然的なものはありません。〔いっぽう理屈には合いませんが〕フローベールはオメーにたいする嫌悪を次のように語るでしょう――「もうブルジョワたちには我慢がならない。ひとりでも見かければ怒り狂いそうだ！」。かたやジッドは誰にたいしても嫌悪を抱かないのです。悪い奴ギュスターブと好い子のジッド。いずれにしても子細に検討する価値はあります。

というわけで，私としてはまったく異存なく「憎悪・嫌悪」という語をすべて拙論から削除いたしました。しかし削除というのはこの語を使った後のことですから，語とそれを消した痕跡は目には見えない記号として残っています。

ジャリのことを話題になさっていることから，あなたが彼に友情を抱いておられるのも分かり嬉しく思います。友人たちにとって彼は感じが好く，魅力的な繊細さを備えた人物でした。〔我々がアンリ４世高等中学で同級になったとき，彼はまだ〕モラン兄弟と『ユビュ』を書いていたあのレンヌ高等中学のクラスでの子供っぽい気質を幾分か残していました[30]。残念なことにあなたの読者は彼のことをその下劣な熱狂によってしか知ることがありません[31]。私ならば，さらに一筆二筆書き足すことで，彼をそういう所から救い出し，一時（いっとき）であれ彼にもっと共感の明かりが当たるようにしたかったところです。

あなたのことを論じた『パリ評論』誌の拙稿と並んで，『ジュネーヴ評論』誌に私自身のことを綴った「クリュニー」が載ります[32]。第１部は家族の思い出です。私にはずいぶん分の悪い話になりますが，ご自分のご家族と比べて楽しんでいただけるでしょう。とはいえ比較していただければ，またお会いしゆっくりお話をするさい，ちょっとした共通の話題となることでしょう。

お手紙に差出人の住所はなく，〔マルセル・〕チエボーからの転送でもなく名宛人の住所もありませんでした。それで念のため，キュヴェルヴィルのご住所，あなたのコンゴ映画〔前月公開されたマルク・アレグレ撮影のドキュメント『コンゴ紀行』〕の最終シーンとして見てみたかったあのキュヴェルヴィルのご住所にお送りします。（一歩また一歩と進むたびに私はふたたびキュヴェルヴィルに近づいてゆきます）。作家たちはなぜ己の回想を映像に残さないのでしょうか。だがいずれはそんな時代もやって来るでしょう。私のほうの平素の住所はトゥールニュ（ソーヌ＝エ＝ロワール県）で，そこを長く空けることは決してありません。敬具

Alb・チボーデ

「憎悪・嫌悪」という刺激的な語を削除するなど，できるだけジッドの意見を容れたというチボーデの報告ではあるが，そしてすでに「あなたが不愉快な思いをなさることはないと確信している」と伝えられてはいたものの，ジッドとしては批評家にたいしなおも若干の不満を表せざるをえない。校正刷で読んだ

小論「ジッドとフローベール」[33] の「慧眼」を称えながらも，同論の難点のひとつとして，前々年コンゴへの長旅に出る前におこなった，過去との訣別の意味を込めた蔵書競売への理解不足を指摘。また書状も半ばにいたると，彼の筆は『一粒の麦』『贋金つかい』両著での仮名(かめい)使用の正当性に言い及んで，『パリ評論』誌掲載予定論文への不満表明にも向けられるのである――

《書簡 6・ジッドのチボーデ宛》[34]

〔パリ〕，1927 年 7 月 27 日〔水曜〕
〔翌月 28 日の《書簡 7》に同封して発信〕

親愛なるチボーデ

またしても私です，でもあなたからのお手紙も立て続けでした……。ほとんど手紙を書き終わったときに，ル・キャピトールの本〔論考集『ジッド頌』〕へのご寄稿〔校正刷〕を〔編集長のギュスターヴ・〕ピゴから受け取りました。強い関心をもってご高論を読みましたが，〔私と〕フローベールとの比較対照はとりわけ慧眼であると思います。ただその慧眼が及んでいない 2 つの点を指摘させていただけるでしょうか。第 2 の点はかなり重要だと思われますが，まずは次の点から――

「ジッドの蔵書競売では，厄介払いしたいお荷物であるかのように『感情教育』の初版が売りに出ていた（1）。彼にとってフローベールはもはや活き活きした力を失ってしまったようだ」，そうあなたは書いておられる。（（1）競売カタログの近い所には『悪の華』の〔第 2〕版も出ていますが，じゃあそれはいったいどういうことになるのでしょうか[35]）。1925 年 4 月 13 日付の私の公開書簡は〔かつての友人作家たちからの献呈本や稀覯書を売り払うという私の行為を案じていたポール・〕スーデーが『ル・タン』紙に引用し，また本日私が受け取った彼の本〔『アンドレ・ジッド』，クラ出版〕にも再録されていますが，その手紙をお知りになるべきです。そこにあなたは，一般向け「セレクト・コレクション」の銘句としてフラマリオン社が引きたがったであろう次のような一文をお認めになることでしょう――「文学にたいする愛は，稀覯書にたいする愛とはほとんど関係がない。現在私が再読に用いている，散歩に携行し鉛筆で書き込みをする 1 フラン 20 サンチームの版でも，『感情教育』は，私が手放し二度と開くこともなさそうなこの初版でと同様に賛嘆すべきものに思えるのだ」[36]。

私の発言が十分に雄弁だとお認めになろうとなるまいと，お説の後続部分が正当であることに変わりはありません。ただ，おそらくは真正性を考慮して小さな修正をひとつ施すのであるならばですが……。

打ち明けて申し上げねばなりません。依然としてご高論〔『パリ評論』誌掲載予定論文〕には残念な思いです。自分の「こころ」について語るほど愚かなことはありませんが，恋愛感情にたいする羞恥は，幼年期のあらゆる羞恥のうち，唯一私が失わずに保っているものです。しかしおそらくそれだけにいっそう激しく，またおそらくそれこそが，もうずっと以前に我が妻をして「自分を悪く見せたいというなんと奇妙な欲求をお持ちなの」と言わしめたものなのです。そうであるだけに，筆相学に詳しい〔フ

ランシス・〕ジャムが〔私の母方の地所と館があった〕ラ・ロックに滞在した初めの頃，私の字に認めたのが善良さだったと申し上げるのはひどく気詰まりなことです。〔善良さという〕この語はおそらく幾分かばかげているので，捨ておきましょう……。しかしあなたはどのような結論を導いておられるのでしょう。

『一粒の麦もし死なずば』と『贋金つかい』で同じ名〔前者のアルマン・バヴルテルと後者のアルマン・ブデル〕が出てくることを理由に，あなたは私が厳しく描く気の毒な人々の名さえ変えていないと思い，そこに私の「悪意（メシャンステ）」の証を求めておられる。しかし親しき友よ，あなたは間違っておられる。『一粒の麦』で同じ名前を使っているのは，そこでも同じように実名を変えているからなのです。そればかりか，私の描写で不愉快な思いをしかねぬ人々すべての固有名や，彼らを同定しかねぬ地名の記載（とりわけ私は「バヴルテル」家〔実名はアンブルザン家〕のことを念頭においています）についても然り。こういった「証拠」には注意しなくてはなりません。それが証明するのはただひとつ，あなたの判断が先入観によるということです。先入観はあなたを，私にとって残酷なほど不快な結論――というのも私には事態を正すことはできないのですから――に導いてしまい，それによりあなたの「与件」が受け入れられ，以後は「規定の誤謬」となってしまうのです。

話をフローベールに戻します。思うに私は彼のことを（幼年期の初めの頃と）同じように常に評価し，若干度合いは落ちるかもしれませんが，同じように愛し敬服しています……。しかしいずれにせよあなたは，ある作家が与える固有の教えもやがては底を突き，再読しても以前のような大きな利は得られなくなることをお認めになれるでしょうか。ブラウニングはどこかで，我々が継続的に抱く賛嘆の念を，さらに高みへとのぼるために一歩また一歩と踏みしめてゆく梯子（はしご）に喩えていますが[37]，あなたはなにゆえそこに敵意や嫌悪・軽蔑〔の意味〕を付与しようとなさるのか。

ヴァレリーは，シャンピオンからスタンダール用の序文を書くよう依頼されたとき，私に言ったものです――「うんざりだよ。僕はもうスタンダールを再読することはできない。彼からは何も学ぶものはないんだ」と。正確な引用ではないとしても，そういう趣旨の発言でした。（そしてエドガー・ポーにたいしても事は同様）。これをもって我々は，ヴァレリーの賛嘆には一貫性がないとか，今や彼はポーやスタンダールを「軽蔑」していると証（あか）し立てられるものでしょうか。

こんな書き殴ったような手紙で遺憾に存じます。多々無礼を申し上げましたが，私の誠意ある愛情をお信じいただきたく。

今日はひどく疲れており，もはや巧く文章を綴ることがかないません。

〔アンドレ・ジッド〕

ジッドが指摘したチボーデ論文の難点は，いずれも最終的には修正ないし削除されることになる。とはいえ，なかなかに注文の多いこの書簡は，ジッドが後便で弁解するように，文通者の「目には不満を抱いた気むずかし屋と映って

しまうのではないかと怖れて」投函されず，ひと月ほどは手元に置かれたままとなるのである……。

翌 8 月の半ばには予定どおり『パリ評論』誌が出来(しゅったい)[38]。さっそく 30 頁を超すチボーデ論文の全篇に目を通したジッドは，同月 19 日の日記にその読後感を書きとめている。相手の存在を意識していない率直・直裁な感想であるだけに，長くはなるが関連書簡との内容重複を厭わず全文を引用しておこう――

> 『パリ評論』誌に発表された私にかんするチボーデの研究にもっと留保条件をつけておかなったことが悔やまれる。抗議したり，逆らったり，自己弁護らしく見えたりするのはいつも不愉快なので，私は彼宛の手紙で，気の毒なシャルル叔父にたいする《憎悪・嫌悪》のこもったあの酷い非難しか取り上げなかった――彼の非難は危うく叔父を手ひどく傷つけるところだった。――そしてこれは，どう見ても贋札の発行に似たものだった。それほど彼の非難は私の心のなかにほとんどまったく信頼も同意も見出しえなかったのだ。
>
> 私の異論にたいする答えとしてチボーデが書き直した部分，つまり最初の部分はたしかに後続部分よりも優れている。後の部分は思いつくと同時にあまりにも急いで書かれたもので，彼が叡智や真の理解力よりも器用さのほうを多く備えていることを証している。もちろん叡智が彼に欠けているというのではない。だが彼はこの長い研究を，私を理解するためよりも，一貫して私に反対しバレスを擁護するために使っている。彼はつねにバレスに関連させて私を咎める。したがって私を非難するか，あるいは少なくとも私を否認しているのだ。[39]

続いては週刊文芸紙『レ・ヌーヴェル・リテレール』8 月 27 日号がチボーデ執筆の記事「ジュール・ルナールとアンドレ・ジッド」を第 1 面に掲載する[40]。ルナールの『日記』（ベルヌアール版）最終巻の出版を機に書かれた両作家の比較論であったが，これを読んだジッドは日をおかず賛辞を批評家本人に伝えている。しかしながら意を決して同封した《書簡 6 》の追伸とも言うべきその文面には，穏やかな言い回しではあるものの，『パリ評論』誌掲載論文への依然として納得しきれぬ気持ちもまた同時に記されていた――

《書簡 7・ジッドのチボーデ宛》[41]

〔19〕27 年 8 月 28 日〔日曜〕

レ・ゾタン / ロワイヤン / シャラント＝アンフェリユール

親愛なるチボーデ

『レ・ヌーヴェル・リテレール』紙の最新号はなんと素晴らしく愉快な驚きをもたらしてくれたことでしょう。ジュール・ルナールと私とのこの小さな対比は実に説得的

かつ巧みで，大いなる喜びをもって拝読しました。私としては両手(もろて)を挙げてお説に賛同いたします。それほどに喜びの大なるがゆえに，ひと月前に書いたものの，あなたの目には不満を抱いた気むずかし屋と映ってしまうのではないかと怖れて出しあぐねていた同封の手紙をようやくお送りする決心がついたという次第。しかしながら今となっては『パリ評論』誌のご高論にもっと注文を付けておかなったことをいささか悔やんでおります。私の苦情を受けて書き直していただいた最初の数頁は，それほどまでに素晴らしいものに思えたのです。〔いっぽう，『パリ評論』誌の編集長マルセル・〕チエボーはご高論の冒頭部しか見せてくれていなかったので，〔後続部分には〕私をひどく不安にさせる点がまだ数カ所残っているからです。

私が〔『法王庁の抜け穴』の巻頭に銘句として掲げ〕フリーメーソンの登場人物アンチーム・アルマン＝デュボワに纏わせて面白がり，また今度は明らかにあなたが私に纏わせて楽しむ，この滑稽な〔ジョルジュ・〕パラントの文言はまことに創意に富むもので[42]，フローベールにおけるペキュシェ的要素，ブヴァール的要素，さらにはオメー的要素さえも明かし確認するかのごとし。しかしあなたは，あたかも私がこの文を自分で案出し，己の商品の標章としたのかのように語っておられる。ご高論を拝読し，私はふと「社会的無神論」という註記にはそれなりの意義がありうるように思いました。ですが，まさに今こそ私が『新しき糧』を書き，私自身の哲学を開陳すべき時期なのでしょう[43]。

何をもって拙著『贋金つかい』を不成功とお考えになるのか[44]。私にふたたび『狭き門』のような作品を書いてほしいと望む人たちの言説，あるいはメディアの冷評に依ったご判断なのでしょうか。そういったものは私に，批評がいかに（実質的な）重要性を有さぬかを教えてくれます。『新フランス評論』誌のオフィスにおいでの節は，売上げ帳を見せてもらってください。当初は芳しくありませんでしたが，『贋金つかい』は今日，『地の糧』とならんで私の著作のうちで最も売れる本なのです。この事実からは，ご高説とはかなり異なる考え方がいくつも導けましょう。ここで興味ぶかく重要な点は，メディアの態度ではなく一般読者の反応なのです。メディアが最初に態度を示すとしても，それには永続的な力はありません。

ジュール・ルナールとは〔マルセル・〕シュオッブの家で出会いましたが，それまでまったく面識がありませんでした。シュオッブがイプセンやトルストイを読ませようとしたところ，ルナールはフランス文学のほかは関心がもてないと反論したのを覚えています。ひどく驚いたものでした。またある日のこと，ルナール夫妻が辞去しようとしたとき，ふたりの身長がまったく同じだとシュオッブが言うと，すでに部屋を出かけていたルナールは首を回し肩越しに言い放ったのです――「そうなんです，寝床では互いの足の指が絡み合うんですよ」。

私の見るところ，ルナールの『日記』は，このジャンルにあってはフローベールの書簡集に等しく重要です。私はまさに貪るように熟読玩味したものです。そればかりか，彼の著作すべてがきわめて優れています[45]。私が高く評価していることを彼自身も知っていました（1890 年から 95 年にかけてクローデルが彼のことを同時代の最大

の作家と見なしていたのを覚えておいででしょうか)。私が彼とのあいだで経験した唯一の意見対立は（それ自体はいたって誠実なやりとりでしたが)『信心狂いの女』にかんするものでした[46]。このときの様子は，たしか拙著『新プレテクスト』の付録として載せた往復書簡に窺えるところです。

マルタン・デュ・ガールは幸いにもポンティニーであなたにお会いすることになるのでしょうか。あなたが参加されるとなれば，今年は不参加の私としてはなおのこと残念です。しかし私は多忙をきわめ，またひどく疲れてもいます。ポンティニーで10日間すごせば，回復するのに2週間かかってしまいます……。パリかジュネーヴでお会いしましょう[47]。敬具

〔アンドレ・ジッド〕

この書簡とそこに同封されたひと月前の《書簡6》，それら2通を併せ読んだチボーデは，次のような前にもまさる長大な返信を認め，ジッドの主張にたいして自らの見解を，大きく3つの論点に分けて説明・敷衍している――

《書簡8・チボーデのジッド宛》[48]

トゥールニュ，〔1927年〕9月1日日〔木曜〕

親愛なるジッド

本日，お手紙ならびに同封のオレンジ色用箋のお手紙を落掌。前のお手紙〔7月23日頃の《書簡3 *bis*》〕もカルパントラで拝読していました（その時期にオランジュの野外劇場で『イフィジェニー』や『オルフェ』を観ながらあなたとお会いできればよかったのですが)。まず次のことを申し上げねばなりません。第1は，〔『パリ評論』誌掲載の〕拙稿冒頭の数ページについては書き直したのではなく，単に校正でご見解の正しさを認める修正を施しました。第2は，掲載前に拙稿全体を手にしておられなかったことを私もあなたと同じように遺憾に存じます。手にしておられれば，間違いなく貴重な示唆や修正を私にしていただけたことでしょう。しかし結局のところ，この雑誌掲載分は確定稿などではまったくありません。雛形あるいは草案のようなものとお考えください。

お言葉では不満を抱いた気むずかし屋と受けとられるのを怖れてということですが，7月のオレンジ色のお手紙を私にお送りなさるのを躊躇されたのは大いなる間違いです。お手紙の内容はきわめて誠実であり，一言でいえば正当です。ご見解を最大限に考慮いたします（ル・キャピトールの〔修正済み〕校正刷はまだ手にしていません。もちろん拙論がそれをタルペーイアの岩〔共和制ローマ時代の処刑場〕に変えてしまうことはありませんが，しかしこの粗描には多くの修正が施されるでしょう)。今のところ私は次のような点を書き留めています。

第1に，アンドレ・ジッド競売目録が明瞭に示す『感情教育』の位置づけにかんするご見解について――『ル・タン』紙の当該号は多分手元に届かなかったため，私はスーデーの近著を読むまであなたが彼に宛てた書簡のことは存じませんでした。いずれにせよ『アンシダンス』収載のご高論の一節で，もはやフローベールから得るもの

はないと（またはほとんどないと）厳しすぎる書き方がされていただけになおさら[49]，『感情教育』にたいするあなたの称賛は貴重なことと思われます。読者はこの一節をほとんど第３者的に，フローベールは価値の尽きた作家なのだとしか解釈できなかったのです。もう何も学ぶところはないから，そう言ってスタンダールやポーについ文章を書くのにうんざりしたヴァレリーのことをあなたは引いておいでです。ええ，しかしヴァレリーがそう我々に話したとしても，同じ事を不幸な読者に語っているわけではありません。とりわけ，科学的素養のあるヴァレリーは，〔ハンス・ファイヒンガーの〕「かの如くの哲学」[50]を実践しています（当該事例の場合，この私ならの哲学をそういうふうに適用・実践することでしょう）。打ち明けて申し上げれば，私自身は批評家としてその必要に迫られないかぎり，およそ２年ごとに手にとる『赤と黒』と『感情教育』をのぞけば，スタンダールやポー，フローベールを再読することはありません。いっぽうラブレーやモンテーニュ，パスカル，ラ・ブリュイエールは頻繁に読み返しています。だからといって我々がフローベールやスタンダール，ポーを総合的（トータル）な作家，無限に示唆的な典型と見なさぬことなぞありませんし（彼らは我々の記憶や過去の読書体験だけで十分にかかる存在となっているのですが），また外的ないし内的にそうするような必要が生じれば，我々がフローベール的世界，ポー的世界，カント的世界，スタンダール的世界のなかで生きることに変わりはないのです。素晴らしいのは，『リュシアン・ルーヴェン』の序文においてヴァレリーがそのスタンダール的な要素をいかにも堂々と示していることです[51]。またラ・フォンテーヌ（『アドニス』，そしてとりわけ『ダフニスとアルシマデュール』）への２つの序文における彼の感嘆すべき古典主義的要素を思い出していただきたい[52]。ご高著『アンシダンス』のフローベールにかんする記述を私が難じるのは，フローベール的なるものを支持するのは時代遅れだと読者に信じさせるからなのです。そうではなく，たとえ再読されなくともフローベール作品は，記憶の彼方に大犬座か大熊座の幾何学的模様とともに現れて，まさに精神世界の果てで大きな戦い，元帥が一群の軍隊を率いた戦いが交わされているという感覚を我々に与えるのです。バルベー・ドールヴィイを読むとどのような楽しみがもたらされるか，それは明らかに語りえぬところです。その種の作家ではないからです。そうである作家とそうでない作家がいるのです。あなたのご見解を読んでしまうと，ひとはあなたがフローベールを後者と見なしていると思ってしまいます。それこそがすべてなのです。とはいえ，「憎悪・嫌悪」という語を使ったのはたしかに少々乱暴でした。たとえ私の配慮をお認めいただけないとしても，この語は校正では間違いなく削ることになりましょう。

第２に――。明らかに「悪意（メシャンステ）」という語についても同様で，同じ論文で使ってしまうところでした。我々は言葉で思想を入念に仕上げるものですが，私は粗雑な文章のなかに紛れていないかぎりは到底受け入れがたい乱暴な語を用いてしまいました。読者そして著者もまた，私が真実とは真逆なことを当の人物に適用したと思ってしまった，誤解はそこから生じたのです。こういった観点から判断できるほど十分にあなたを存じ上げているわけではありませんが，筆跡学の助けを借りるまでもなく，明白な

事実として，あなたと数日続けてすごす機会をもった者ならば誰でも（私はポンティニー旬日懇話会の参加者のことを思い浮かべています），しばしば驚きとともに，素晴らしく繊細で気配りの効いた善良さをあなたのうちに見い出します（次にお会いしたときにその例をいくつか挙げておみせしましょう）。この善良さは一部にはあなたの生来のものであり，また一部にはあなたが「女性たち」に囲まれて育ったことによるのだろうと思います。こういった点で，あなたのうちに悪魔的な邪悪さを求めてまわる文学者たちよりも，あなたのほうがはるかに分があるのです。彼ら文学者は，身近な立場からあなたのなかに認めた「自分を悪く見せたいという欲求」に騙されているのでしょうか。〔そうではなく〕これとは別のもの，すなわち芸術家と人間とのあいだに二重性があるのだと私は思います。前者のみが公的なものとして批評の対象となることはご理解いただけるでしょう。私が扱いたいのはまさにその点なのです。話題を広げすぎたうえに，暗い井戸のなかで道路作業員の防水服を着てでしか〔曖昧模糊とした言い方でしか〕自分の考えを説明できていないとすれば，どうかご容赦ください。

バルザックが自作にダンテから借りた題を付けたのは天才的なアイデアでした。〔紀元前〕5世紀の大悲劇作者がホメロス（オメリーク）歌いだったように，19世紀の大小説家はダンテ（ダンティアン）読みなのです（なかでも〔著名な美食家にして文筆家の〕キュルノンスキーならばダンテ主義者（ダンティスト）と呼ぶような者たちがいますが，それについては今は措きましょう）。バルザックやフローベール，ドストエフスキーのような作家の作品は地獄・煉獄・天国を内包しています。そして彼らはダンテのように，己の主要な力を地獄を描き構成することに傾注しました。多くの人物を地獄に落としたのです。フローベールはエンマを肉欲の悪循環のなかに置き，オメーを，そして煮え切らぬ者どもを愚行の輪のなかに置きました（後は見て見ぬふり！）。『ブヴァール〔とペキュシェ〕』はほとんど厳密に地獄の輪のひとつとして構想されています。『カラマーゾフの兄弟』はおそらく文学が描いた地獄としては最大のものを我々に提示しています（〔当初の構想どおり続篇が〕完成していたらばの話ですが）。なんと多くの「煉獄篇」があることか！「哲学的研究」は『人間喜劇』のなかで『神曲』の「天国篇」に類似した位置を占めていますが，その先にはさらに丸々一冊の本〔もうひとつの「煉獄篇」〕が書けることでしょう。そして次の法則を提示できるというわけです。すなわち，地獄にたいする感覚を持ちあわせぬ偉大な小説家はいない，という法則。

しかし地獄にたいする感覚は各人各様です。ドストエスキーの無慈悲な地獄，バルザックの社会的で構成された地獄，フローベールの皮肉な地獄，そして，しばしば18世紀の物語から考案されたかのようなスタンダールのこの文明化された地獄。イギリス人たちにあってはほとんど常に，ユーモアの白い光線が地獄の最も黒い輪にまで影を落としています。

ところで，小説家の資質のひとつとして，あなたは間違いなく人間的な地獄にたいする感覚を持っておいでです。さらにあなたは，その感覚の神学的な根源のいくつか，義認の観念や神の選択の観念などさえも身に備えておられるように私には思えます。あるいはむしろ，フローベールのように，あなたは地獄にたいして特殊な感覚をお持

ちであるが，その感覚とは，人間アンドレ・ジッドのうちにあるか，少なくともあなた本来の部分より分量的に優位をしめる悪意，すべての人間にある原罪やこの世に生を享けた罪から来る悪意と一致するものではない。そうではなく，異常者・落伍者・愚か者たちを悪魔的な技巧と歓喜をもって作り出す創造的な悪意と一致するものなのです。あなたの内なる芸術家はこの悪意に共感を抱くが，文明人はおそらく同じ程度にそれに抵抗を覚えるか，異質なものと感じてしまうでしょう。芸術家としては結局フローベール流にこの悪意に共感を抱くのです。フローベールは人間的な憐憫には無縁であり，自分が作り出した愚か者たちを残酷すぎるほど愚弄している，そうメルキオール・ド・ヴォギュエは述べていました[53]。しかしフローベール自身は「すべての〈哀歌詩人（エレジアック）〉は下衆である」というルコント・ド・リールの言葉を熱狂して唱えたものです[54]。メルキオールならば例証に用いえたであろうように，いずれにせよ哀歌詩人，地獄をもたぬ人々が書く小説は迫力のない下らぬものです。人生においては太陽のように善人でなければなりませんが，小説のなかでは月のごとくが好いのです。というわけで，人間としてはとばっちりを受けることなく，芸術家の部分があなたにこの悪意の徴をもたらさんことを。

地獄と天国。ダンテにあっては天国への導き手はベアトリーチェと〔シラクサの〕ルチアでした。フローベールにおいても天国は女性的要素（アルノー夫人，〔『純な心』の〕フェリシテ）からなるのは注目すべきことです。そしてあなたの場合も同様。とりわけあなたの場合はそうです。芸術家の「善良さ」はあなたにあっては，女性の登場人物にしか顕れません。

第３に――。『贋金つかい』の不成功を話題にしたとき，私はひとつの事実を確認したのです（活字になったものではなく，口頭の会話での批評家たちの抵抗。同作について私のほうから話をしたり，私に話しかけてきた優秀な読者たちは不安を抱き，慎重な態度を示し，断定的な評価ができないでいました）。また売れ行きの良さは，お祝い申し上げますが，そのこと自体にはいかなる重要性もありません。まったく別次元のことであるのはご承知のとおりですし，ここで批評的悪意と善良な一般読者とを対比なさるような幼稚なこともなさらないでしょう。しかし根本は次の点です。すなわち，私はこの不成功を『感情教育』の不成功と比較したのであり（この比較はもっと推し進めて行うことも可能でしょう），『感情教育』は世紀の傑作のひとつであり続けている，そこから結論を導いていただきたい……。私がお手紙にあった〔拙稿にたいする〕不快な（*désagréable*）[55] という付加形容詞を一転して大賛辞と捉えさせるのもまたフローベールなのです。

残念なことに〔この手紙もすでに〕３枚目に入りました。私は，明日から始まる〔ソーヌ＝エ＝ロワール県〕マコンのラマルチーヌ記念祭で，ほんの脇役としてジョルジュ・ルコントの手助けをしに行くため[57]，もうじき汽車に乗るところです。本状ではまだ肝心な点にも触れておりません。サン＝ブリユーの哲学者パラントからお採りになり[56]，あなた自身は責任を負おうとはなさらぬ『法王庁の抜け穴』の銘句についての議論です。ちょっとひどい話ですよ！　だから私が真面目な意見を申し上げ，あな

たの言い逃れを非難しようとしていたのもその点だけだったのです。しかしこれもまた単なる誤解なのでしょう。またお会いしましょう。いずれにせよ本状はこのままのかたちでお送りします。あなたにたいする私の誠実な友情をかくも不十分にしか表しえていないのは遺憾ではありますが。

アルベール・チボーデ

追伸――様々な理由でポンティニーには行きませんでした。一番の理由は，8月の後半をモルヴァンとトゥーレーヌへの旅行ですごしたためで，やっと帰ってきたところです。年内はずっとジュネーヴの公開講義でロマン主義について話すことになります。そのうえさらにポンティニーの学部で同じ話をしないといけないのでしょうか。〔それでは〕ヴァカンスはただの権利ではなく義務になってしまいます。というわけでオリンポス山登りは諦め，スイスの友人たちだけを行かせました。匆々。

チボーデの長口舌にたいしてジッドがどのような反応を示したのか，委細は不明とせざるをえない。ただ，後掲《書簡 9 》の文面から判断するかぎり，ジッドがなんらかの言葉を返したことはまず疑えまい――

《書簡 8 *bis*・ジッドのチボーデ宛》
9 月 10 日頃，おそらくはパリから発信。ジッドの旧著『人さまざま（キャラクテール）』（1925 年 2 月刷了）の献本に添えられたと推測される。ジッドの青年期の文学仲間モーリス・キヨにも言及した模様。

いずれも短い随想からなる断章形式の小冊子『人さまざま』は，パリ 6 区ボナパルト通りで書店「狭き門」を営むピエール・ド・アルティング夫人が 1925 年から 28 年にかけて手がけた同名叢書の第 1 巻（書店名・叢書名の由来は言わずもがな）。2 年半以上前のこの著作が今になって話題に挙がった経緯は推測の域を出ないが，次は同書恵投の礼から始まるチボーデ書簡。論考集『ジッド頌』用の予定稿「ジッドとフローベール」の修正作業についての報告，また『一粒の麦』への変わらぬ評価が綴られている――

《書簡 9・チボーデのジッド宛》[58)]

トゥールニュ，〔1927 年〕9 月 16 日〔金曜〕

親愛なるジッド

ご高著『人さまざま』を落掌，ジュール・ルナールの日記を読むのと同じ内心の喜びを覚えつつ拝読しました。『新フランス評論』誌次回分の拙稿を校正中でしたが，そのある箇所で，ご高著の一節が素晴らしく収まりがよいので註に引かずにはおれませんでした[59)]。「狭き門」叢書は広告を打たないので，ご本がそこから出版されたことは知らずにいました。私家版だと思っていたのです。さにあらずば，ずっと早くに入手していたことでしょう。献本をいただきお礼申し上げます。雪だるま式に断章を加

筆してゆく『人さまざま』のご計画はたいへん結構なことだと思います。しかしそのさいにはおそらく，ラ・ブリュイエール自身がしたように，章題を付してグループ分けする必要が生じましょう。

この手紙と同便で〔ル・キャピトールの〕ピゴに拙論「ジッドとフローベール」の修正済み校正刷を送ります。相当数の削除を施し，原稿段階での不正確ないしあやふやな点を落としました。ご一読いただき，加筆すべきご所見などありましたら，ご遠慮なくお伝えください。考慮させていただきます。

スーデーから，〔『一粒の麦』にたいする彼の否定的評価に反論した〕拙稿[60]にはまったく気を害してはいないという，実に感じのよい手紙をもらいました。手紙はまたあなたご自身に述べていたこと，すなわち『一粒の麦もし死なずば』には感心しなかった旨を書いています。しかし私が思うにその点は，公平で分析的かつ的確な，そしてとりわけ実に大人の精神の持ち主スーデーらしからぬ態度であり，この幼年期・青年期の覚書に目を閉ざしているのです。

月末にパリに行くつもりです。あなたがおいでになるか，旅行中かを新フランス評論で尋ねてみます。もしパリにおいでであれば，あなたと再会しお話しできるのは大いなる喜びです。というわけで近いうちに[61]。匆々

Alb・チボーデ

追伸―― 1912 年頃に出版されたキヨの長編小説の痕跡を見つけました。同時期の『新フランス評論』誌に書評が載っているのです[62]。それがあなたの目にとまっていなかったとは何とも意外なことです。

A. T.

この書簡に先立ち 9 月初めには，チボーデの筆になる 2 つの文章，『贋金つかいの日記』の書評（『新フランス評論』9 月 1 日号）と，「コンゴにおけるアンドレ・ジッド」と題する記事（『新ヨーロッパ』9 月 3 日号）が立て続けに出ていたが[63]，両者の遣り取りにはそれに触れた記述は見当たらない。だが月が改まると，ジッドはまたもや長大な書簡を受け取ることになる。すでに両者が触れていた話題ではあるが，『法王庁の抜け穴』の銘句に採られたジョルジュ・パラントの一文をめぐって，チボーデが社会思想史の観点から突っ込んだ議論を繰り広げてみせたのである――

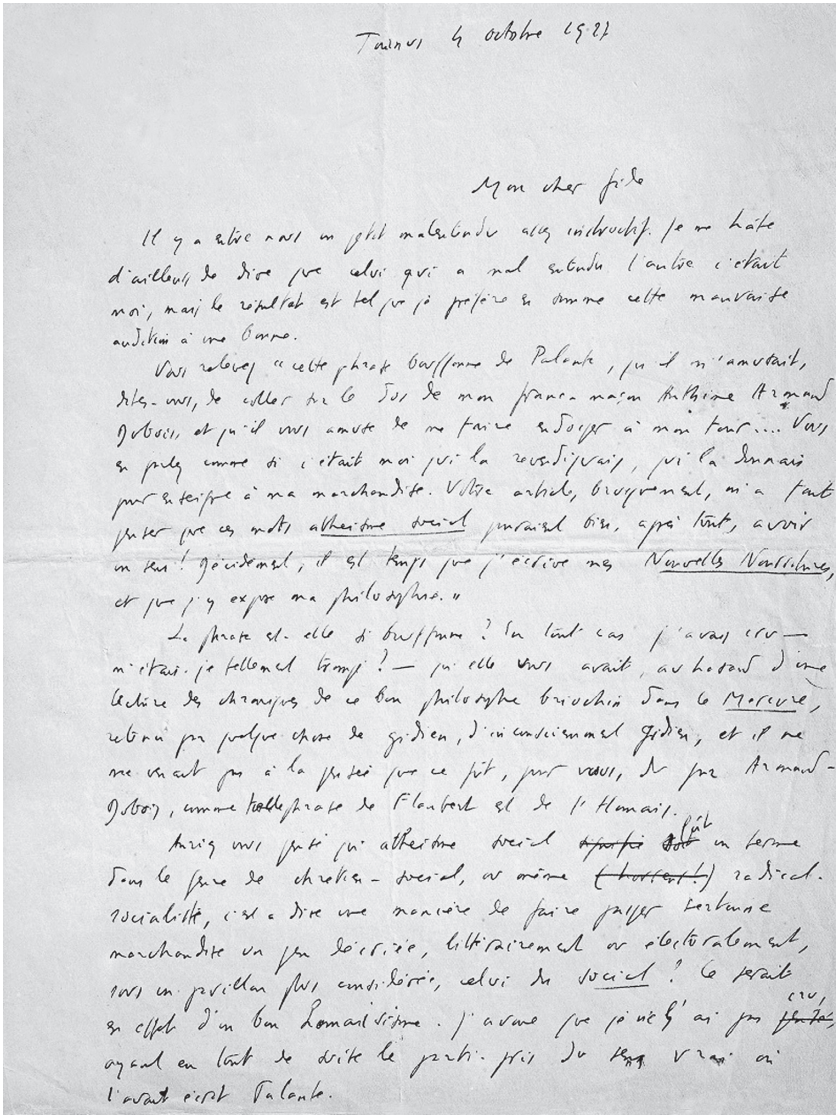
《書簡 10・チボーデのジッド宛》[64]

トゥールニュ，1927 年 10 月 4 日〔火曜〕

親愛なるジッド

我々のあいだには小さいが，かなり教えに富んだ誤解があります。そもそも相手の話をちゃんと聞かなかったのは私のほうだと急ぎ申し上げますが，しかし結果的には正確な理解よりはこの無理解のほうが好かったと思っています。

あなたは〔8 月 28 日付《書簡 7 》で〕次のように述べておられる――「私がフリー



Tournus 4 octobre 1927

Mon cher Gide

Il y a entre nous un petit malentendu assez instructif. Je me hâte d'ailleurs de dire que celui qui a mal entendu l'autre c'était moi, mais le résultat est tel que je préfère en somme cette mauvaise audition à une bonne.

Vous relevez « cette phrase bouffonne de Palante, qui il m'amusait, dites-vous, de coller sur le dos de mon franc-maçon Anthime Armand Dubois, et qu'il vous amuse de me faire endosser à mon tour.... Vous en parlez comme si c'était moi qui la revendiquais, qui la donnais pour enseigne à ma marchandise. Votre article, brusquement, m'a fait penser que ces mots athéisme social pouvaient bien, après tout, avoir un sens ! Décidément, il est temps que j'écrive mes Nouvelles Nourritures, et que j'y expose ma philosophie. »

La phrase est-elle si bouffonne ? En tout cas j'avais cru — m'étais-je tellement trompé ? — qu'elle vous avait, au hasard d'une lecture des chroniques de ce bon philosophe briochin dans le Mercure, retenu par quelque chose de gidien, d'inconsciemment gidien, et il ne me venait pas à la pensée que ce fût, pour vous, du pur Armand-Dubois, comme toute phrase de Flaubert est de l'Homais.

Auriez vous pensé qu'athéisme social ~~signifie~~ ~~soit~~ fût un terme dans le genre de chrétien-social, ou même ~~(horreur !)~~ radical-socialiste, c'est-à-dire une manière de faire passer certaine marchandise un peu décriée, littérairement ou électoralement, sous un pavillon plus considérée, celui du social ? Ce serait en effet d'un bon homaïsisme. J'avoue que je ne l'ai pas ~~pensé~~ cru, ayant en tout de suite le parti-pris du sens vrai où l'avait écrit Palante.

1927 年 10 月 4 日付ジッド宛チボーデ書簡の自筆オリジナル（個人蔵）第 1 葉

メーソンの登場人物アンチーム・アルマン＝デュボワに纏わせて面白がり，また今度は明らかにあなた〔＝チボーデ〕が私に纏わせて楽しむ，この滑稽なパラントの文……。あなたは，あたかも私がこの文を自分で案出し，己の商品の標章としたのかのように語っておられる。ご高論を拝読し，私はふと〈社会的無神論〉という註記にはそれなりの意義がありうるように思いました。ですが，まさしく今や私が『新しき糧』を書き，私自身の哲学を開陳すべき時期なのでしょう」。

パラントの文言はさまで滑稽でしょうか。いずれにせよあの一文は，たまたま『メルキュール・ド・フランス』誌でこのサン＝ブリユーの善良な哲学者のコラムを読まれたさい，そのジッド的な何か，意図せずジッド的である何かによってあなたの注意を引いたのだと思っていました――私はそんなにひどく間違っていたでしょうか――，またフローベールの同様な文がオメー的であるように，あなたにとってはこの文がアルマン＝デュボワ的なものだなぞという考えは私の頭には思い浮かばなかったのです。

「社会的無神論」とは社会的キリスト教，さらには社会主義的急進論と同類の術語である，すなわちそれは評判の劣る商品を，文学や選挙のために，もっと評判の勝るブランド，「社会的」なるブランドの下で流通させる方策とお考えだったのでしょうか。打ち明けて申せば，私はそうは思いませんでした。パラントがあの文に込めた真の意味に即座に同意したからです。

パラントが社会的無神論を話題に挙げたのはいかなる意味においてであったかはおそらくご存じのところ。社会的有神論は一種の異名であり，デュルケームの論敵たちはこれを社会的事実主義（レアリスム）と呼んでいましたが，デュルケームの唱えていたものこそそれだったのです。彼にとって，社会は個人に先立ち，個人とは別個に存在するものでした。「個人を除いても社会は残る」。幾分か世俗化したコント主義ですが，その背後には実証主義的人類教（グラン＝テートル）の姿がはっきりと透けて見えていました。デュルケームはユダヤ教聖職者の息子でしたから，私は〈社会〉が彼にとって幾分なりとも〈永遠〉の相を呈していなかったなどと断ずるつもりは毛頭ありません。また論敵たちはとかく彼のことを最後のスコラ哲学の徒と詰（なじ）りましたが，彼自身はベルクソン哲学を悲しげに見やりつつも〔狭量を排して〕これを受け容れていたのです。大の勤勉家であり，社会学の見事なアトリエを仕切った真に評価すべき人物でした。しかし私がくどくど申さずとも，パラントのような頑固で少々熱狂的な個人主義者が，デュルケームに対抗し，我こそは社会的無神論の信奉者なりと公言して，この大御所を揶揄したのだということは誰にも分かるところでしょう。

したがってパラントにとって社会的無神論が意味するのは，反事実主義（レアリスム），あるいは社会的唯心論なのです。いっぽうアルマン＝デュボワにとっては，それが意味するのは次のものであるように思われます。すなわち社会的利益への熱情を公言する無神論，聖金曜日に〔魚料理ではなく〕ソーセージを振りかざす社会的共和制です。第一の意味，パラントの主張のほうが自然だと思えるのは（私にはあなたがもうひとつの意味を思い浮かべたなどとは信じられぬほどです），そこには次のような続きの一文があるからです――「私は 15 年前から，社会的無神論を擁護すべく 1 ダースの著作を書いて

きた」[65]。さあ，どうです！『アンドレ・ワルテル』以降，ジッドは我々に１ダースの本を提供してきた，そう私は言っていました。これらは個人主義の手引き書です。社会的無神論という術語がぴったりの作品群なのです。ジッドの登場人物，ジッドの否（ノン）ほど社会的な枠組みにたいして反抗的なものはありません。〔…〕

また次の点もご留意ください。つまり「社会的無神論」においては，アルマン＝デュボワという人の好いフリーメイソンが示す反教権主義よりも，教権主義，あるいは少なくとも福音主義のほうがはるかに存在を嗅ぎ当てやすい点です。キリストが相手とするのは個人であって社会ではない，キリストの死は個人の救済のためである，そうあなたは仰る。そしてここであなたはパスカルを引き継ぐのです――「私は汝のためにかばかりの血の滴りを流した」[66]。ヴェルレーヌから一節を引けば――

然り，あなたの大いなる御心，そは我が今際（いまわ）の刻（とき）
その刻を幸いなれと望まれ，かくあらしめんと
天地に先立ち，光に先立ち
その大いなる御心もて，すべてを整えたまいし[67]

カエサルのものはカエサルに……そのことはよく承知しております。しかし神の王国は，その完璧な姿においては社会的無神論を包摂するものでありましょう。

ご留意ください，そう私は申し上げました。しかしこの注意は，「福音書まであと何キロ」といった我々の進む方向を指し示すものではないので，これ以上考慮するのは止めにいたしましょう。社会的有神論は，もっと慎ましい土地，サン＝セルグくらいの中程度の高さの場所で澄んだ健康に好い空気をもたらし，あらゆる気質に好適だというわけではないにしても，あなたには適するものだったように思われます。それはかつてバレスが〔『根こそぎにされた人々』の哲学教師ポール・〕ブテイエによって見事に描いたタルチュフ的人物たちの肖像のひとつです。あなたもまたかかる人物たちを嗅ぎ分けるのが実にお得意です。ご著書『人さまざま』のフレデリックがその一例です――「常に実益を優先する性格，思考のすべてが実利追求。役に立ちたいという熱意は，初めは人を勘違いさせ，彼自身も気前の好さだと考えているものが，実際には他人に無理を強いる欲求に外ならない……。フレデリックは自分の利害とフランスの利害を一致させよう心を砕く」[68]。彼は心を砕く，そうあなたが仰るのは，おそらくどこかに悪意を込めておられるのでしょう。彼は自分の利害を一致させる，あるいは自分の利害をフランスの利害と一致させます。それは物質的な利害であり，あなたが語っておられるのはルーアン風のブルジョワのことなのでしょう。しかしながら自分の知的利害とフランスの知的利害を一致させる人々もいるのです。〔したがって〕社会的有神論があるように，究極的には国家的有神論もまた存在するのです。

社会的有神論が実証主義的人類教において具現化するように，フランスという女神についての〔シャルル・〕モーラスの言葉に要約される国家的有神論。さらにあなたはモーラスが『知性の未来』のなかで「コントによる社会秩序」[69]を論じた長い章のこともご存じでしょう。ここで我々が問題としているのは，最も正真正銘の知的関心，つ

まり「観念」の存在を求める知的関心です。社会的有神論あるいは国家的有神論とは多かれ少なかれ，存在論的根拠によって正当化された有神論に属するものであり，その人にとっては観念が存在の要請を内包するような哲学者や知識人の本性に属するものなのです。

ジッド，あなたはただ異なるばかりか互いに対立しあう様々な精神の系譜に属しています。ここで話題にしている有神論はあなたの有神論とは違うものなのです。あなたが哲学者であったとすれば，デュルケームはあなたと一緒にいても時間の無駄に終わるでしょう。政治家であったとすれば，モーラスが無駄な時間をすごすことになります。あなたにとって存在するのは個人だけだからです。高名な経済学者の叔父上にとって，彼ら個人はほとんど，あるいはまったく存在しないという事実からは，叔父上その人にたいするあなたの愛情の如何にかかわらず，ふたりのあいだには知的な溝が穿たれています。あなたがキリスト教にたいし保持するものの核はキリストという人物です。小説があなたを魅了し，あなたの心を捉えるのは，観念的な問題を人間個人の問題に置き換えるからです。

いっぽう，あなたが問題小説（roman à thèse）を嫌悪するのは，それが観念の構築を優先するあまり人物を押しつぶしてしまうからです。あなたに観念への好み，さらには情熱がないということではありません。そうではなく，〔ジュリアン・〕バンダとは正反対のかたちでの好みや情熱なのです[70]。あなたはひとりの個人，とりわけ複数の個人の持続における観念を，液状で形の崩れた流動的なものと見ておられる。さらには，問題小説の対極をなすのは対話小説ということになりましょう。そこでは問題＝命題は自らの埃をかぶりながら転がり崩れるのです。しかし対話のほうは個人の複数性，個人のソクラテス的好みを要求します。まさにそこでこそ，あなたは本来のあなたたるのです。

対話ということでは，あなたをヴァレリーと対話させれば人は得るところが大きいでしょう。ヴァレリーは個人には関心がありません。彼はあなたにはない純粋観念・原型的観念を異常なまでに好む，あるいはそういった嗜好に取り憑かれています。そして純粋観念をあらゆる有神論，わけても社会的有神論とは対極のところまで推し進めます。あなたの小説好きと彼の小説嫌悪は，同じ天秤の両端に位置し互いに均衡を保っているのです。

様々な精神を愛する者はすすんでこの天秤竿の理論を定式化することでしょう。〔そのさい〕次のことに注意せねばなりません。すなわち，あなたがたはふたりの芸術家，いずれも高踏派・象徴派・マラルメ主義が作り出した芸術家だということです。しかしながら最早この短い手紙では論じきれぬ地点まで来てしまいました。「かかる手紙こそは幸いなる罪（フェリックス・クルパ）」と申しましょうか。私のことを思（おぼ）し召して，そう考えさせていただければと。敬具

アルベール・チボーデ

饒舌・多弁ともいえるチボーデの議論にたいしてジッドはどのような反応を

示したのか。返事を出さかったとは考えられないが，残念ながらこれに関連する記述・記録は何ひとつ残されていない。現在知られるかぎりでは，両者間の書簡交換は翌々年3月末から4月初めにかけてのジッド『モンテーニュ論』刊行をめぐる遣り取りまで絶えてなくなるのである[71)]。

*

以上，本稿ではジッドとチボーデが1927年に交わした往復信を若干の補説と附註を添えて通覧した。表題に「対話」と冠しはしたものの，前年末のチボーデ書簡2通（《書簡1》と稿末の《補遺》訳出分）を加えれば，残存の確認された総数11のうちジッドのものはわずかに3通と偏りが大きく，遣り取りの細部に少なからぬ不明点が残るなど，いかにも隔靴掻痒の感は否みがたい。

とはいえ，時に長々と続くチボーデの「ディスクール」が幸いして，ジッド側の文面が透かし模様のように浮かび上がることもまた確かである。かくてまがりなりにも復元された書簡交換は，単なる友好・儀礼の場をこえて，印刷公表に先だち，あるいは事後の正否を検討すべく，互いの見解・主張を突き合わせ確認しあう一種の「アトリエ」として立ち現れてくる。もとより不十分な行論ではあったが，今回の資料紹介ではそのような点も幾分かは示しえたのではあるまいか。

註

*）本稿は「JSPS 科研費：課題番号 18K08455」の助成を受けた研究の一部である。

1）単行書には，フローベールやスタンダール，マラルメ，ヴァレリーにかんする各研究，革命以降を扱ったフランス文学史など邦訳されたものも多い。なお紙誌掲載論文の一覧としては次の書誌を参照—— John C. DAVIES, « Bibliographie des articles d'Albert Thibaudet », *Revue des Sciences humaines*, avril-juin 1957, pp. 197-229.

2）Voir *Littérature*, n° 146 (n° spécial Albert Thibaudet), juin 2007 ; Albert THIBAUDET, *Réflexions sur la littérature*. Édition établie et annotée par Antoine COMPAGNON et Christophe PRADEAU, Paris : Gallimard, coll. « Quarto », 2007, et *Réflexions sur la politique*. Édition établie par Antoine COMPAGNON, Paris : Robert Laffont, coll. « Bouquins », 2007.

3）Voir Michel LEYMARIE, *Albert Thibaudet, « l'*outsider *du dedans »*, Villeneuve-d'Ascq : Presses Universitaires du Septentrion, 2006. ただしジッド＝チボーデ往復書簡にかんするかぎり，同書の資料体調査は十分であるとは言いがたい。直接的

な引用が数語ないし数行と断片的なのは致し方ないとしても，まず気にかかるのは参照された書簡群の網羅性がさほど高くないことである。後述のように現在までに保存が確認された両者の往復信は総数 40 通だが，同書ではパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫所蔵の外はほとんどすべてが見落されている。またいくつかの明らかな転写ミスにくわえ，日付表記が不完全な書簡の年代決定・推定にも誤りや未解決のものが少なくない（たとえば後註 7 を参照）。そのため議論は時として正確なクロノロジーに立脚せず，失考と呼ばざるをえない記述も見うけられる。なお，同書は 2018 年にポケット版で再版されている（rééd. sous format de « poche », Paris : CNRS Éditions, coll. « Biblis », 2018）。

4）チボーデ・アルシーヴ散逸の経緯については次を参照—— André Talmard, « Les manuscrits de Thibaudet », in *Rencontres Albert Thibaudet 1986*. Actes du colloque organisé les 18-20 septembre 1986, *Société des Amis des Arts et des Sciences de Tournus*, t. LXXXV, 1986, pp. 132-134.

5）拙著『ジッドとその時代』，九州大学出版会，2019 年，第 3 部・第 1 章「ジッドとチボーデ—— 1909 年から 1920 年代初めまでの交流」（297–350 頁）を参照されたい。

6）Voir sa « Préface inédite pour une nouvelle édition des *Nourritures terrestres* », *Le Manuscrit autographe*, n° 5, septembre-octobre 1926, pp. 21-26. なお，後掲のチボーデ宛《書簡 3 》でも訂正しているが，ジッドは『地の糧』初版の「不成功」を強調するあまり，この序文草案では，当初 10 年間の販売実数 500 部を誤って（あるいは意識的に）「100 部」と記していた。当該序文は翌 1927 年 2 月にクロード・アヴリーヌ社から出来（しゅったい）の豪華版（ルイ・ジュウの挿絵入り，690 部限定）の巻頭に配されるが，そのさい巻末には「付録」として各年ごとの初版実売部数の一覧が添えられることになる。

7）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号ッ823–32（封筒は保存されておらず）。なお，レイマリー前掲書はこの書簡に言及するが，オリジナル冒頭部の月表記 « Xbre » を「10 月」と読み，また年号についても誤って「1924 年」と推定している（voir Leymarie, *Albert Thibaudet, « l'*outsider *du dedans »*, *op. cit.*, p. 105 et p. 131, note 152）。

8）早くから他者の筆跡に強い関心を示していたジャムは，ロワイエールの求めに応じて，1926 年の『自筆原稿』創刊号から翌年夏まで計 8 回にわたり「筆跡学」と題する論考を連載した。そこに取り上げられたのは，自身の父母や，マラルメ，レニエ，ルイス，メーテルランクら約 60 名の作家・詩人の筆跡。ジッドのそれについては「インクで黒ずんだ終わることなき糸，文学という迷宮におけるアリアドネの糸」と評している（voir Francis Jammes, « Graphologies », *Le Manuscrit autographe*, n° 1, janvier-février 1926, p. 55. なお，これらの手書きテクストは全文が 1999 年の『フランシス・ジャム協会会報』[*Association Francis Jammes*, bulletin n° 29, juin 1999] で活字化された）。チボーデもロワイエールの要請に応え，ここに言及されるジッド宛書簡を皮切りに，ヴァレリーやレオン＝ポール・ファルグ，ポール・スーデーに宛てた書簡（ファルグ宛は活字化での掲載）などを寄稿している（voir

THIBAUDET, « Lettre à Paul Valéry », *Le Manuscrit autographe*, n° 8, mars-avril 1927, pp. 44-49 ; « Lettre à Léon-Paul Fargue », *ibid.*, n° 10, juillet-août 1927, pp. 92-94 ; « Lettre à Paul Souday », *ibid.*, n° 14, mars-avril 1928, pp. 131-135, etc.)。

9）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号γ823-12（封筒は保存されておらず）。

10）ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestallozi, 1746-1827）はスイスの教育実践家・思想家で，現代教育学の先駆者のひとり。ルソー『エミール』の理念を実践・適用しようとしたことで知られる。

11）Voir THIBAUDET, « A Letter from France : Gide's Autobiography », *The London Mercury*, t. XV, janvier 1927, pp. 302-304. ちなみに，この書評を保存していたジッドは，その第1段落冒頭の記述「さほど面白味はなく，ひどく退屈な本，ジッドがこれまでに書いた唯一退屈な本」(« a not very interresting book, and a very tedious, the only tedious one he has written ») にたいし，自筆で「ポーランが私に語ったところでは，これは翻訳者による加筆」と欄外註を施していた（現在はドゥーセ文庫が保管）。ただし，当該箇所が言及しているのは『一粒の麦』ではなく，1924年公刊の『コリドン』のこと（voir la lettre de Paulhan à Gide, du 8 janvier 1927 [leur *Correspondance (1918-1951),* éd. Frédéric GROVER et Pierrette SCHARTENBERG-WINTER, Paris : Gallimard, 1998, p. 63]）。

12）Voir THIBAUDET, « Lettre à André Gide » [du 6 novembre 1926], *Le Manuscrit autographe,* n° 7, janvier-février 1927, pp. 38-47. 本稿末（36-42頁）に日本語訳を示す。

13）Voir THIBAUDET, « La Construction en critique », [*Bibliothèque universelle et*] *Revue de Genève*, février 1927, p. 130 *sqq.* さらにチボーデは1933年に自身が編んだプレイアッド版『エセー』の序文でも，この「空隙」について同様な見解を述べている――「1669-1724年。モンテーニュの大空位期。1595年から1650年まで『エセー』の版は平均して2年ごとに出ていたのに，後の56年間は新版の刊出がないままに経過する。そして〔ゲ・ド・〕バルザックやマルブランシュに抗して，モンテーニュに好意的なラ・ブリュイエールの評価が全き結実をもたらすのは，ようやくヴォルテールの世代になってからのことなのだ」(Chronologie de Montaigne établie par THIBAUDET, in *Essais*, Paris : Éd. de la NRF, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1933, p. 22)。

14）個人蔵未刊書簡（封筒は保存されておらず）。

15）前註6を参照。

16）一般には小説家・批評家と見なされるジッドは，また劇作家としても認知されることを早くから欲していた。しかしながら彼は，『カンドール王』上演の失敗（1901年のパリ初演の不評，そしてとりわけ1908年のベルリン公演の惨憺たる結果）以後，「公衆」にたいし強い警戒心をいだき，長らく戯曲の創作・上演から遠ざかる。その間の唯一の実践が，1922年ヴィユー・コロンビエ座（ジャック・コポー演出）での

旧作『サウル』の上演であったが，劇評家たちの評価は賛否両論に割れ，この「不成功」によって実質的な劇壇復帰には至らぬ情況が依然として続いていたのである。

17）ペトリュス・ボレル（1809-1850，通称「狼狂（リカントロープ）」）はフランスの詩人・翻訳家・作家。本稿末に日本語訳を示した前年 11 月 6 日付のチボーデ書簡 42 頁を参照。

18）「我らの友人Ｆたち」はチボーデ同上書簡末尾の記述に応えた言及だが，それが具体的に誰のことを指すのかは不詳。

19）なお 4 月 28 日付マリア・ヴァン・リセルベルグ宛，および 5 月 3 日付ロジェ・マルタン・デュ・ガール宛によれば，ジッドは 4 月 19 日から月末までのローザンヌ滞在中，チボーデのほかに，エドモン・ジャルー，ギィ・ド・プルタレス，ロベール・ド・トラーズ（スイス人小説家・エッセイスト），エドゥアール・アンドレア（ジッドが青年期より厚い信頼をおいていたジュネーヴの精神科医）ら少なからぬ知己と立て続けに会い，「一時（いっとき）として自分の時間というものがなかった」（voir André Gide, *Correspondance avec Maria Van Rysselberghe, 1899-1950.* Édition présentée, établie et annotée par Peter Schnyder et Juliette Solvès, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 23, 2016, p. 642 ; André Gide - Roger Martin du Gard, *Correspondance (1913-1951).* Introduction par Jean Delay, 2 vol., Paris : Gallimard, 1968, t. I, p. 307）。

20）Voir［Maria Van Rysselberghe］, *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide*［éd. Claude Martin］, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n°s 4-7, 1973-1977.

21）*Ibid.*, t. I, p. 328（8 août 1927）. 引用文中マリアはチボーデに原稿を依頼した編集者を「ピジョ（Pijot）」と記すが，これはル・キャピトール出版のギュスターヴ・ピゴ（Pigot）の誤記。しかもそれ自体が『パリ評論』誌の編集長マルセル・チエボーとの取り違えである。

22）Voir Thibaudet, « Gide et Flaubert », recueilli dans le volume *André Gide*, Paris : Éd. du Capitole 1928（ach. d'impr. 25 janvier 1928）, pp. 281-288（et dans l'édition courante sous le titre de *Hommage à André Gide*, même éditeur, 1928［ach. d'impr. 10 septembre 1928］, pp. 193-199 ; 邦訳は『ジイド禮讃』〔服部一夫・小久保碌共訳〕, 叢文閣, 1934 年に収載の「ジイドとフロオベル」［233-242 頁］を参照）。

23）ジッドがジャリのことを話題にしたのは，おそらくは『パリ評論』誌掲載予定論文（冒頭部）のなかで次の記述を目にしたことがきっかけ――「ジッドはジャリとよく会っていた。それで彼の小説〔『贋金つかい』第 3 部・第 8 章〕には，このユビュ親父が顔を出してきたのである」（Thibaudet, « André Gide », *La Revue de Paris*, 13e année - n° 16, 15 août 1927, p. 753）。

24）「後年，母が見せてくれたこの頃の手紙のなかで，叔父のシャルル・ジッドは僕の母宛に次のように書いている――《この結婚が幸福なものかどうかは定かではない。またこの結婚を強いることは，非常に重大な責任を負うことになる。だがまた，もしこの結婚が成立しない場合には，まず間違いなく双方とも不幸になるだろう（僕

は手紙の文言をそのまま写している）。だから確実な不幸と起こりうる不幸のいずれを選ぶかだけがほとんど唯一の問題なのだ》」（*Si le grain ne meurt*, in GIDE, *Souvenirs et voyages*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON, avec la collaboration de Daniel DUROSAY et Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 297. 傍点は引用者）。

25）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号γ823-9（封筒は保存されておらず）。*Cf.* la lettre de Gide à Ernst Bendz, du 20 janvier 1927（*Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 53, janvier 1982, pp. 90-91）.

26）Voir THIBAUDET, « André Gide », art. cité, p. 750 ; GIDE, *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 41 et p. 1161, note 3（19 août 1927）. ちなみにジッドは1932年1月にも，チボーデが自分に帰した叔父にたいする「憎悪・嫌悪」について，批評家の見方を正当ならずと述べている（voir *ibid*., p. 336）。Voir aussi « Charles Gide »（article où Gide apportera des rectifications au portrait de son oncle）, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 35, juillet 1977, pp. 35-42.

27）チボーデは1898年10月から1900年7月までカルパントラの中等学校（コレージュ）で教鞭を執っており，その後もしばしば同地を訪れていた。

28）フレッド・ボワソナ（Fred Boissonnas, 1858-1946）はスイスの写真家。その風景写真47葉が翌々年出版のチボーデの著作『アクロポリス』（*L'Acropole*, Paris : Gallimard, coll. « Galerie pittoresque », 1929）を飾ることになる。

29）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号γ823-11（封筒は保存されておらず）。

30）ジャリはレンヌ高等中学在学中（1888-1891年），友人のモラン兄弟（兄シャルル，弟アンリ）とともに『ユビュ王』のプロトタイプ『ポーランド人たち』を上演していた（ただしこの『ポーランド人たち』を書いたのはシャルルであり，それゆえ決定的な確証には欠けるものの，『ユビュ王』を一種の剽窃とする説が古くからある）。1891年には，高等師範学校受験のために上京（つごう3回受験するも結局同校への入学は叶わず），学籍登録したアンリ4世高等中学の受験準備級では，いまだ無名であった哲学教師ベルクソンの教えに大いに触発・感化され，またチボーデとは級友として親しく交わった。なお以上については，ジャリ研究者・合田陽祐氏からの情報提供に負うところが大きい。ここに記して同氏への深甚なる謝意を表する。

31）『贋金つかい』第3部・第8章で，登場人物たちが会食する宴会場に闖入し，ピストルを発砲するなど奇矯な行動をとる「珍妙な道化風の男」ジャリが描かれた場面への言及（voir *Les Faux-Monnayeurs*, in GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. II, pp. 393-398）。前註22も参照。

32）Voir THIBAUDET, « Cluny », [*Bibliothèque universelle et*] *Revue de Genève*, octobre 1927, pp. 418-435, et novembre 1927, pp. 588-603（texte identique publié en volume : *Cluny*, Paris : Éd. Émile-Paul frères, coll. « Portrait de la France »,

1928). フランス中東部ソーヌ＝エ＝ロワール県の町クリュニーはチボーデの母方の生国。

33) Voir THIBAUDET, « Gide et Flaubert », art. cité.

34) ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 823-13（タイプ打ちの写し，あるいは下書き。若干数の自筆修正入り）。ちなみに，残存していない原本には「オレンジ色の用箋」が用いられていた（《書簡 8 》の冒頭を参照）。

35) Voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*. Avec une Préface de M. André Gide. Paris : Édouard Champion, 1925 [Éd. originale de *L'Éducation sentimentale* (2 vol.), p. 18, item n° 64 ; Seconde éd. des *Fleurs du Mal*, p. 11, item n° 27]. ジッドの意見を容れて，チボーデは印刷テクストでは当該の 2 つの文を削除することになる。なお，1925 年 4 月にパリで行われたジッド蔵書競売の具体的な模様については，前掲拙著『ジッドとその時代』，第 4 部・第 3 章「蔵書を売るジッド」(431-442 頁）を参照されたい。

36) Lettre de Gide à Paul Souday, du 13 avril 1925 [publiée dans l'article de ce dernier, « André Gide : *Si le grain ne meurt* […] », *Le Temps*, 17 avril 1925, p. 1, col. 4, puis reprise dans son livre *André Gide*, Paris : Simon Kra, coll. « Les Documentaires », 1927, pp. 60-62。本文中の「 1 フラン 20 サンチーム」は，フラマリオン社の廉価版叢書「セレクト・コレクション」が 1925 年当時に設定していた販売価格。2 年後（まさに《書簡 6 》と同時期）に初刷が出来（しゅったい）する『一粒の麦』(叢書 268 番，1927 年 7 月刷了）や『背徳者』(叢書 270 番，同年 9 月刷了）のそれは 1 フラン 75 サンチームに改定されている。

37) ジッドがここで英国詩人のいずれのテクストに言及しているのかは未詳。いくつかの英単語を想定してブラウニング作品のコンコーダンス（Richard J. SHROYER & Thomas J. COLLINS, *Concordance to the Poems and Plays of Robert Browning*, 7 vol., New York : AMS Press, 1996）を検索してみたが，残念ながら該当テクストの特定には至らなかった。

38) Voir THIBAUDET, « André Gide », art. cité, pp. 743-775。

39) GIDE, *Journal II*, op. cit., p. 41.

40) Voir THIBAUDET, « Jules Renard et André Gide », *Les Nouvelles littéraires*, 27 août 1927, p. 1, col. 2-4.

41) ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 823-15（タイプ打ちの写し。封筒は保存されておらず）。ちなみにドゥーセ文庫には同書簡の自筆下書きも保存されている（整理番号 γ 823-14）。

42)「私の選択はすでに終わっている。社会的無神論を選んだのだ。この無神論は，15 年ほど前から，一連の著作で表明してきた……（ジョルジュ・パラント）」というのがその銘句。パラント（Georges Palante, 1862-1925）は，1911 年から 1923 年まで『メルキュール・ド・フランス』で書評欄「哲学」を担当していた批評家。ニーチェ信奉者として不道徳と反社会的個人主義を提唱。その理論によれば，思考とは生理

学の産物であり，身体にのみ起因する。ジッドはアンティーム・アルマン＝デュボアをかかる理論の影響下に置くことで，この登場人物が盲信する科学的合理主義と，彼の身体的疾患が精神的疾患を惹起する様相とを批判的に提示しているのである。

43）当該記述からは，早くもこの時点でジッドが『新しき糧』（1935 年刊）の構想を抱いていたことが分かる。Voir la « Notice » pour *Les Nouvelles Nourritures*, in GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, *op. cit.*, t. II, p. 1324.

44）Voir Thibaudet, « André Gide », art. cité, p. 771.

45）ジッドは象徴派の雑誌『レルミタージュ』で担当した文芸時評で 2 度ルナールを取り上げているが，なかでも『葡萄畑の葡萄作り』（1901 年）を論じたさいには，「私は彼がまるで物故作家のようだと感心している――つまり，これほど見事な書き手が今日存在していることに驚くのだ。〔…〕だからフランス文学万歳！」（GIDE, « Quelques livres », *L'Ermitage*, décembre 1901, pp. 407-408）と，時評を読んだルナール本人が当惑するほどの賛辞を呈している。さらにこういった評価は，対象の眼を意識せずに書かれた文章においても変わるところがない――たとえば 1905 年の日記には「見事なルナールの作品を再読」と記し（GIDE, *Journal I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 455），またその 2 年後オーストリア出身の批評家・翻訳家フランツ・ブライに宛てた書簡では，同時代のフランス人小説家の筆頭にルナールの名を挙げ，「誉高くすばらしい作家」と称えている（Franz BLEI - GIDE, *Briefwechsel (1904-1933)*. Bearbeitet von Raimund THEIS, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1997. p. 132）。

46）1909 年にオデオン座で上演された戯曲『信心狂いの女』をめぐる意見対立のことを指す。みずからも少なからぬ戯曲を書いたジッドは，演劇に思想をもりこむことに関心がなかったのではないが，あからさまに思想を表現することは好まず，特定の主張をもついわゆる「問題劇」にはもともと批判的であった。このため盲目的信仰の虚偽と愚かさを揶揄したルナールの作品にたいしても同様の反応を示すことになった。すなわち，ルナールの反教権主義じたいが問題なのではなく，問題はそれを露骨に主張することで芸術作品を単なる風刺攻撃文書に貶めた点だと強く非難したのである。曰く，「芸術作品は何事も証明すべきでない。証明しようとすれば必ずごまかしを行うことになる」云々。Voir GIDE, *Nouveaux Prétextes*, Paris : Mercure de France, 1911, pp. 321-323.

47）以後しばらくの経緯から見て，この面会が成った蓋然性は低い。

48）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 823-8（封筒は保存されておらず）。

49）Voir GIDE, *Incidences*, Paris : Éd. de la NRF, 1926, pp. 93-94（partie de « Feuillets » parus pour la première fois dans *La NRF* du 1er mars 1922, p. 319）.

50）ハンス・ファイヒンガー（Hans Vaihinger, 1852-1933）はドイツの哲学者・カント研究者。『かのようにの哲学』（*Die Philosophie des Als Ob*, Berlin : Reuther & Reichard, 1916）の著者として知られる。

51）Voir Valéry, « Préface. Au sujet de Stendhal. À propos de Leuwen », in Stendhal, *Lucien Leuwen*, 4 vol., Paris : Honoré Champion, 1926-1927, t. I, pp. I-LI.

52）Voir Valéry, « Au sujet d'Adonis », in *Adonis* par Jean de La Fontaine, Paris : Au Masque d'Or / Devambez, 1921, pp. I-XXXII ; « Oraison funèbre d'une fable », in *Daphnis et Alcimadure* par Jean de La Fontaine, Paris : Xavier Havermans, 1926, pp. III-XII.

53）ウージェーヌ＝メルキオール・ド・ヴォギュエ（Eugène-Melchior de Vogüé, 1848-1910）は 19 世紀末にロシア小説をフランスに紹介したことで知られるが，フローベールとフランスの写実主義にたいして厳しい立場をとっていた。たとえばその著書『ロシア小説』（Paris : E. Plon, Nourrit et Cie, 1886, pp. XXXI-XXXIV）を参照。

54）ボードレールもまたルコント・ド・リールのこの「深遠な言葉」を引いて，心情と抒情性の合一を目指したロマン派詩人たちとの訣別を宣していた（1866 年 2 月 18 日付ナルシス・アンセル宛書簡，阿部良雄訳『ボードレール批評 4』，ちくま学芸文庫，1999 年，332 頁参照）。

55）「不快な」（*désagréable*）。ジッドが《書簡 6 》第 5 段落で用いていた形容詞は « désobligeant(es) ».

56）ジョルジュ・ルコント（Georges Lecomte, 1867-1958）は小説家・劇作家にして批評家。ドレフュス事件にさいしては断固たるドレフュス擁護派であった。

57）パラントはいくつかのリセで哲学教師をつとめた後，死の前年まで 27 年の長きにわたりブルターニュのサン＝ブリユーで教壇に立った。このため，生国はパ＝ド＝カレー県ブランジー＝レザラスであったにもかかわらず，「ブルターニュの哲学者」と称される。

58）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 823-10（封筒は保存されておらず）。

59）Voir Thibaudet, « Réflexions sur la Littérature. Propos de la critique », *La NRF*, n° 169, 1er octobre 1927, pp. 521-528. じっさいチボーデは『人さまざま』の次の一節（Gide, *Caractères*, Paris : À l'enseigne de la Porte étroite, 1925, pp. 11-12）を註に引いている――「校正刷を修正しているとき，まだ知らないでいたアンドレ・ジッドのテキストを読んだ――《私はいつも自分のなかに相矛盾する一群を一丸として感じる。ときどき鈴を鳴らしたくなる。そして耳を蔽って席を立っていきたくなる。自分の意見を言ったって何の意味があろう》。〔シャルル・〕モーラスは議会体制をアミエルの頭脳に喩えてはいなかったか？」（526 頁。モーラスによるとされる文末の比喩の出所は不詳）。

60）Voir Paul Souday, art. cité ; Thibaudet, « Paul Souday et ses contemporains », *Candide*, n° 181, 1er septembre 1927, p. 4, col. 1-2.

61）チボーデの上京時期がこの記述どおりであったとすれば，ジッドは 9 月 20 日頃から少なくとも同月末まではキュヴェルヴィルに滞在していたので，両者の面会が成った蓋然性は低い。

62）モーリス・キヨの小説『男の娘』（*La Fille de l'homme*. Préface de Pierre Louÿs,

Paris : Fontemoing, s. d. [1914]）のこと。じじつ，『新フランス評論』誌は同書出版当時，ミシェル・アルノー（ジッドの義弟マルセル・ドルーアンの筆名）による短い書評を掲載していた（voir *La NRF*, n° 62, 1er février 1914, rubrique « Notules », pp. 361-362）。ちなみに，キヨの 1927 年 9 月 30 日付ジッド宛書簡（ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 484-234）はこの件に関連するものと思われるが，残念ながら筆者は未見。

63）Voir GIDE, « *Le Journal des Faux-Monnayeurs*, par André Gide », *La NRF*, n° 168, 1er septembre 1927, pp. 390-391 ; « André Gide au Congo », *L'Europe nouvelle*, n° 499, 3 septembre 1927, p. 1156. とくに前者においてチボーデは，この創作日記には二義的で些末な記述が多く，作家の「小説観の生成」については教えるところが少ないと不満を述べている。

64）THIBAUDET, « Lettre à André Gide » [du 4 octobre 1927], *Le Manuscrit autographe*, n° 12, novembre-décembre 1927, pp. 112-116（活字化での掲載）。なお，1980 年 6 月パリのドゥルオ会館で行われた競売の目録には同書簡の抜粋が再録されている（voir le cat. vente Lettres & manuscrits autographes, Hôtel Drouot, 17 juin 1980, item n° 160）。

65）« Depuis quinze ans j'ai écrit une douzaine d'ouvrages pour le défendre. » ジッド自身による正確な引用は次のとおり —— « Cet athéisme [social], j'ai exprimé depuis une quinzaine d'années dans une série d'ouvrages. »

66）Blaise de PASCAL, *Pensées*（Brunschvicg 553 ; Lafuma 919）.

67）Paul VERLAINE, « Prière du matin », troisième strophe（poème recueilli dans son *Amour*, Paris : Léon Vanier, 1888）: « Oui, votre grand souci, c'est mon heure dernière, / Vous la voulez heureuse, et, pour la faire ainsi, / Dès avant l'univers, dès avant la lumière, / Vous préparâtes tout, ayant ce grand souci. » 日本語引用は拙訳による。

68）Voir GIDE, *Caractères*, *op. cit.*, pp. 12-13.

69）*Sic*, pour « L'Ordre positif d'après Comte »（Charles MAURRAS, *L'Avenir de l'Intelligence*, Paris : Albert Fontemoing, 1905. pp. 113-137）.

70）いっぽう「知識人」の役割をめぐって，とりわけこの時期に顕在化していたチボーデ自身とバンダの思想的対立については，レイマリー前掲書，171-172 頁を参照。

71）チボーデの批判的書評（« Montaigne et André Gide », *Les Nouvelles littéraires*, 30 mars 1929, p. 1, col. 1-2）にたいするジッドの反論と，それへのチボーデの応答を参照—— voir la lettre de Gide à Thibaudet, du 29 mars 1929, partiellement reproduite dans la *Bibliothèque de M. Albert Thibaudet*, cat. de la vente publique des 12-16 février 1937 à l'Hôtel Drouot, Paris : Libr. Giraud-Badin, 1937, p. 46, item n° 238 ; et la réponse de ce dernier, du 2 avril 1929, BLJD γ 823-31, partiellement reproduite dans LEYMARIE, *Albert Thibaudet, « l'*outsider *du dedans »*, *op. cit.*, pp. 105 et 131, note 148.

《補遺》

チボーデのジッド宛書簡[1)]

トゥールニュ，〔1926年〕11月6日〔土曜〕

親愛なるアンドレ・ジッド

『地の糧』新版の序文はあなたの読者たち，〔いや〕一人の読者に宛てられた手紙です[2)]。というのも観客は常に多数ですが，読者は常にひとりだからです。大衆を形成するにはどれほどの愚か者が必要なのか，そうシャンフォールは問うています[3)]。私には，ある一定数の愚か者が公の場で結びつく前から愚か者だったわけではなく，〔もともとは〕人嫌いで明敏な単独者が，この結びつくというそのことで愚かな公衆となるように思われるのです。シャンフォールは悲劇を，しかし喜劇も作っていました。当時はこの知的公衆の愚かさがあらゆるかたちで，〔つまり〕喜劇ではおふざけ，悲劇では真剣な調子で舞台に上げられていたわけです。この点で1830年はなんという柔軟性を示していたことでしょう！〔メリメ編の〕「クララ・ガズルの戯曲」，〔ユゴー編の〕「自由劇」，ルナンの〔哲学〕劇，〔フレデリック・〕ルメートルの喜劇と，読者が観客席への退却を強いられることなく観客となるような回り舞台！ そして『地の糧』の時代の人々は，劇場でどんなに安らぎを得ていたことでしょう！ 多分に象徴主義的な演劇，〔ヴィエレ＝グリファンの〕『庭師フォカス』，〔ジャムの〕『詩人とその妻』，〔クローデルの〕『黄金の頭』，〔サン＝ポル＝ルーの〕『鎌をもつ貴婦人』，そして〔あなたの〕『サウル』！ しかし我々はなんと悪い観客だったことか！ ヴィユー＝コロンビエ座では，一座の素晴らしさ，密度の濃さにもかかわらず，役者がサウルを演じているのではなく，サウルを表現するために演じているように思えたのです。

マラルメが『ハムレット』について考えていたのがまさにこれであったのかどうか，私には分かりません。しかし彼によれば――おそらくあなたの場合もそうでしょうが――理想は一人芝居なのです。舞台にひとり，客席もひとり。私も理想とするところです。愛とは何でしょう，愛それ自体でなくて何なのでしょう。いやむしろ（ここで他人（ひと）のことを言うのは何とも不謹慎ですが！）いわゆる知識人たちにとって，愛とはこの二人芝居でなくて何なのでしょうか。そこには確かに俳優と観客がおり，行為と光景のあいだに

1）Thibaudet, «Lettre à André Gide», *Le Manuscrit autographe*, n° 7, janvier-février 1927, pp. 38-47. この書簡の原文はチボーデのジッド宛書簡群のなかでもとりわけ内容の把握が容易でない。筆者はその数カ所について複数のフランス人研究者に教示を乞うたが，彼らのいずれもが当該箇所の難解ないし文意不明瞭を指摘している。したがってここに掲げるのは，あくまでも本文の理解をいくぶんかなりとも助けんがための暫定的日本語訳であることをあらかじめ承知されたい。

2）Voir Gide, «Préface inédite pour une nouvelle édition des *Nourritures terrestres*», *Le Manuscrit autographe*, n° 5, septembre-octobre 1926, pp. 21-26.

3）«Il y a à parier que toute idée publique, toute convention reçue, est une sottise, car elle a convenu au plus grand nombre.»（Nicolas de Chamfort, *Maximes et Pensées*, chap. II）.

は前進，分解，光と影との明暗法（キアロスクーロ）があるのです。美食法（ガストロノミー），味覚の入門書といえばどうでしょうか？ コメディー・フランセーズで『女の学校』や『フィガロの結婚』が上演された火曜日にはキュルノンスキー〔主催〕のディナーがありましたが[4]，当日は故ジャック・ド・モンテスキューが献立を決めたものでした[5]。それ以外はもっぱらカンタンかミランドでした。しかし，我らの友テスト氏がときに食するあの繊細美味な料理には，『ハムレット』や『テンペスト』〔への嗜好〕を見出すことはできないでしょうか。こういったものはすべて書物へと導くためにだけ存在しているのです。真の一人芝居とは〈書物〉のこと。そして〈書物〉，〈書物〉の論理，〈書物〉の作者たちは，自らの台帳にもとづき，独自の言語を駆使して，あのシェイクスピア，一人芝居のモリエールのような役者兼作家に，ルソーが自らの時代に課した芝居，バレスが我々の世代より前に優れた方法で導いた芝居，そしてバレスの後では，文学生活の主要な場を占めるべく，ジッド，あなたが今日その責任を負うべき芝居を求めるのです。

名前は思いつきませんが，そういった役割は確かにあるのです。私には聖ヨハネのように，指を差し出して示すことしかできません。よろしければ，コリフェウスとでも呼びましょうか。あるいは〔ウエルギリウスの〕『牧歌』はあなたに理想の登場人物たちを提供するのが常なので，〔それに因んで〕むしろガルスと呼ぶことにしましょう。この〔古代ローマの詩人にして〕エジプトの総督は，その音楽のおかげで，我々の想像力にリズムを与えることができるのです。

ガルス，聴衆にはその内面世界が大きな意味をもち，〔それがゆえに〕自分の年代記を聴衆に負っている男。最初は，沼地にいるティテュルスのように，何も思うところはありませんでした。笛を上手く吹けることが分かり，幾人（いくたり）かのために笛を吹いた。そしてその者たちはこのような音楽は未だ聴いたことがないものだと思った。〔アナトール・フランスの小説〕『天使の反乱』のとある章の末尾に描かれる，あの耳にしたことのない長老ネクテールの笛です。早くもルソーの音楽が『学問芸術論』で魂に道を開き，バレスの音楽が（夜ともなると，聖ヤコブが〔夢のなかで〕天国への道を開くように）『ベレニスの庭』において魂・感性・知性へと道を開き，それに先立っては，バレス自身が続き（suites）をもつ本と呼んだ『自由人』（まさに「続きのある本」ではありませんか，我々が秘かに保ちおくダイヤモンドのごとき「耳にしたことのない奏での笛」です）。『地の糧』について，批評家は誰もこの著書について語らなかった，10 年間で 100 部しか売れなかった，と教えてくださったそのことに感服しております。我々が知っているように〔後世に〕続き

4）モーリス・エドモン・サイヤン，通称キュルノンスキー（1872–1956）は美食家・料理研究家・ユーモア作家。チボーデは，この「食通の王」を筆頭として定期的に豪華な晩餐会を開いた「味覚心理学者アカデミー」の事務局長を務めている。

5）ジャック・ド・モンテスキウは「秀でたピアニスト」で，キュルノンスキーやジャン＝ポール・トゥーレ，ルネ・ド・キャステラらの友人。Voir Inge Huber, *Savoir-vivre à la Curnonsky : Köche, Künstler, Kurtisanen oder die Geheimnisse eines Gourmets*, Norderstedt : Books on Demand, 2018, p. 141.

をもった本にとって，これはなんという特権だったことでしょう！ しかしあなたは，外部からは稀にしか認められぬ状態を微笑んで受け容れていたマラルメのところで，ガルス〔的精神〕に親しまれたが，そのガルスは今やクレオパトラの宮殿に住まい，梅檀製のテーブルで，ほとんど軍功知られざるところから身をおこしながら，早くもほぼ同輩のバレスと並んで若者たちの王となったアントニウスからの便りを読んでいるのです[6]。

年に 10 人の，これら 100 人の読者，私はその最初の 10 人のひとりでした。発売当日に手に入れた『地の糧』は，しばしば散歩や旅行に携行し，大きな内ポケットに入れていたので，汗で表紙の角が傷んでいます。尊い傷です。私の感動は，野外という言葉に込められた意味と，その野外でかくまで実体のある本を読んだ経験が以前には一度もなかったことから成っていました。この野外は，今日少年たちがボールを追いかけていればすぐに手に入れ，少女たちがいとも簡単に征服してしまったものですが，ジッド，我々はなんと困難な思いをして，そこに向かって穴を穿とうとしていたことでしょう！ 私の時代には，まだそこには到達できなかった，とドガは言いました。あなたもモンテルランや〔ジャン・〕プレヴォにたいし，ドガと同じように皮肉たっぷりに，「我々の時代には，我々は呼吸をしていなかったのだ」，そう仰ることができるでしょう。

私はあなたの読者だった，そしてその私があなたをひとりの読者にした。〔作家をひとりの読者にした〕この読者こそが，タロー兄弟が，というよりはジェローム・タローですが，その死を位置づけるべく，「カイエ・ヴェール」叢書のある巻〔モーリアック《癩者への接吻》〕に寄せた序文で[7]，偉大な読者と名指されるに値したのです。私が言わんとするのは大量の本を読んだ人のことではありません。そうではなく，偉大な作家であるのと同じような意味での偉大な読者のことです。すなわち，その存在がなければ，作家たちは何もなしえず，何者にもなりえなかった，忠実にして幾分かは犠牲を払った友人のひとり。〔タローが序文を捧げた〕アンリ・ジュネがそうでした。彼は私の趣味を信頼してくれており，〔勧めにしたがい『地の糧』を〕買い，遠慮がちに，そして冷静に〔私の意見を〕認めてくれたのです。私にはあれほど直な音楽とともに届いた初めのほうのページも，彼には存在感があるようには思えませんでした。〔しかし〕雨や乾燥，重苦しい期待，水の滴りについての一節を含む第 16 頁あたりで（記憶に頼っての引用です）[8]，多分に啓示的な衝撃を受けたのです。それこそがまさに時代感覚というものでした。描写や，対象との緩やかで正しく健康な合一が好まれていたのです（〔その意味ではカトリックへの回心後〕対象への服従を語るときの〔アンリ・〕ゲオンのことをさまでジッド派だと思ってはなりません[9]）。ジュネは，あなたが何かを残したページ，あなた

6）チボーデがここでアントニウスになぞらえるのは言うまでもなくジッドのこと。

7）Voir Jérôme THARAUD, « Hommage à Henri Genet », in François Mauriac, *Le Baiser au lépreux*, Paris : Grasset, coll. « Les Cahiers Verts », 1922, pp. 11-19.

8）頁数はチボーデの記憶違い。正しくは『地の糧』初版（Paris : Éd. du Mercure de France, 1897）の 31-32 頁。

9）Voir Henri GHÉON, *Saint-Maurice ou l'obéissance*, Paris : La Revue des Jeunes, 1922.

が序文で語るあの素足が触れ，また離れた大地に感嘆したのです。

作品の全面的な不成功を，あなたは苦々しげに語っておられる。その原因を，当時の文学が放っていた人工的で閉鎖的な臭気に帰しておいでです。だが本当にそうでしょうか。人工的――あなたのお考えでは象徴主義。閉鎖的――あなたの想定では自然主義。〔しかし〕単に人は（今日もそうであるように）その時々のなかで生きていたのです。文学とは継続するものです。あなたは『ナルシス論』を書くことで，人工的なものにはまったく貢献なさらなかったのでしょうか？　そして私が好んだ，そして今も大いに好む『パリュード』を書くために，あなたはある時点では閉鎖的な資質を必要とされたのではありませんか？『ナルシス論』を越えゆくために，なるほどたしかに！　だが『パリュード』を書いたからには，自分にはもはやどうでもよいこと，『パリュード』も，『地の糧』を書いたからには，もはやどうでもよいことなのだ。『パリュード』の時のように，今度は『地の糧』にも留まらなかった，〔序文の〕第3・第4段落であなたはそう仰っている。〔続いては〕結婚と福音書が『地の糧』を超えたのだ，と。ではそれら〔結婚と福音書〕は何によって超えられたのでしょうか？　だが「超えた」というこの通り言葉（ジャルゴン）には笑わざるをえません。私はあの哲学的な三段論法を思い起こします。まずは経験論（ヒュームがよく為したところです）。次いで，カントはいかにしてそのヒュームを超えるか。さらに，人はいかにしてそのカントを超えることができるのか。そして私は何度カントを超えたのか。しかし，もっと巧い例として，フローベールの傑作は『感情教育』における空白であると言うときにプルーストが示すイメージを借りて[10]，『サランボー』と『ボヴァリー夫人』を隔てるもうひとつの空白を加えましょう。ノルマンディーの同郷人〔フローベール〕のように，あなたはご自身の作品間を隔てるこの空白によって，この空白のなかの運動によって，最も深遠な音楽に到達なさるのです。そして私がまた思い浮かべるのは（白から青へ），隣り合う2本のドーリア式円柱の間（あいだ）あいだにあって，それ自体の刳形（くりがた）と柱身の丸みとをつくりながら，充満と空虚としてではなく，2つの補完的な実体として，円柱と交互に並びあうあの巨大な紺青色の石棺群なのです。この空間の柔軟性，一冊の本から別の本へ，ひとりのジッドから別のジッドへと流れるこの運動，それこそがあなたなのです。

ガルスを作り上げているのは，この白，この青，この動きなのです。ガルスは，私たちの文学のなかではさほど昔からの存在ではありません。私はこれが彼の誕生なのだと認めるに足るほど長く生きてきました。私の思うに，サント＝ブーヴ，あの『ポール＝ロワイヤル』のサント＝ブーヴが彼のための地ならしをしてくれたのです。人生には続き（つづき）があること，そのようなタイプの人生は，ドイツ人にたいするゲーテのように，モンテーニュやパスカルが提示していることに初めて気がついたのがサント＝ブーヴでした。天分とは関わりなく，そうなのです。ヴォルテールはおそらくルソーよりも偉大な人物ですが，ルソーの人生はむしろ続き（つづき）の人生と分類されるところでしょうが，ヴォルテールの人生ははそうではありません。サント＝ブーヴはヴィクトル・ユゴーとは距離を置か

10）Voir le célèbre article de Proust : « À propos du “style” de Flaubert », *La NRF*, 1er janvier 1920, pp. 72-90.

ねばなりませんでしたが，その理由のひとつは，この巨大な天才とは違ってサント＝ブーヴは，その狭い穴ぐらに籠もり，自らは1880年以降，スタンダールが提示したようなタイプの人間だと感じていたからです。続きをもつ作家には必然的におのおの友の会という続きがあります。モンテーニュ友人クラブ，パスカル友の会，スタンダール・クラブというふうに。思い煩うことなくその作家が送った人生にのめり込み，『パルムの僧院』ではファブリス・デル・ドンゴのことしか考えず，〔スタンダールの愛人〕メラニーや〔思い人〕バンティにかんする僅かな資料を貴重なものと見なすかどうかは，後世に委ねられているのです。しかし自分の快楽だけを追い求めたスタンダールは，そんなことは考えもしませんでした。彼はただ理解されることを求め，それが1880年頃のことになろうとは分かっていても，クラブや個人崇拝のかたちをとるとは思ってもみなかったのです。バレスの才覚は，〔遠い先の〕1950年を待つことなく，意識的に，しかも非常に若くして続きのある人生を望んだことでした。ただちに，たいへん賢明な仕方で，自分に与えられてしかるべき続きを成したことだったのです。『自我礼拝』が天才的な一撃でこの即時的爆発を決定づけたのです。〔ローマ帝国皇帝〕ヴェスパシアヌスがそうでした。彼の死後に銅像を建立すべく金集めが進んでいるのを知り，「余の亡き後ではない！」，そして手を差し出し，「台座はすでにここにあり」と言ったのです。バレス，あるいはよろしければ（しかしあなたはそういう言い方をお好みになるでしょうか？）バレスの作品は，すぐにバレス・クラブを結成させることになりました。バレスの後継は1区選出の代議士ではありません（便宜的に選挙区を復活させた表現ですが）[11]。自分のアカデミーの座席を引き継いだ者でもありません。それは人生に続きを有した作家なのです。

あなたは今，光のなか，あるいはそう言ってよければ，明暗法（キアロスクーロ）のなか，先へと続いてゆく人生の起伏のなかにいらっしゃる。それは何よりもまず，あなたが，あるいはあなたの知性の魔が，ご自分の人生に連続性を，ご本とご本のあいだに連続性をもたせたからです。『一粒の麦もし死なずば』において，あなたは人生の連続性，人生が（なし遂げたもの，というよりもむしろ）受け継いだものに非常に敏感であるように私には思われます。人生があなたにとって，よくできた線のように見える，ご自分がそれを描いたことにご満足である，あるいは，それが神によって描かれたことに満足されておられる（表徴，あなたはそうお考えになるし，私もそうだと考えますが），あなたはカルヴァンよろしく，恩寵によって義とされている，そんなふうに私には思えるのです。そして，あなたの人生のこの継続（suite）を，他の人生における継続から，レオナルド〔・ダ・ヴィンチ〕称揚の真正な蛇行線のうちに認められるような連続性から切り離さないようにしましょう。ですが，ガルスはひとつです。私は，カトリックのフランスをプロテスタントのフランスと分けて考えぬのと同じように，あなたをバレスから切り離すことはいたしません。〔あなたは彼の〕後継者ではありません。しかしふたりの歩みは並行しており，彼は山の頂にあり，あなたは暗い谷にある。あなたの『地の糧』のアラビア風の庭は『ベレニス

11）バレスは，1889年のナンシー管区での選出（1期在任）に続き，1906年にパリ1区（レ・アール地区）の下院議員に選出され，1923年に没するまで継続して在任。

の庭』に，『パリュード』は『自由人』に，『エル・ハジ』は『地と快楽と死』にそれぞれ対応しているのです。しかし心理学にたいし「情熱的な慎重さ」を示していたジュフロワのように[12]，あなたがさまざまな運動を時間をかけて分解しながら待ち続けた小説（ロマン）〔の世界〕に，バレスは『根こそぎにされた人々』により，齢30にして早々と身を投じていました。あなたの『根こそぎにされた人々』たる『贋金つかい』は遅れてやって来た作品なのです。そして，『根こそぎにされた人々』が〔バレス自身の〕『法則の敵』に先行したように，『法王庁の抜け穴』がそれに先行していました（両作品にリズムの類似性があることは確かですが）。それこそ逆説だと言い立てる向きもありました。あなたが成さなかったことをバレスは成したというのです。彼は文学生活と市民生活という二重の生活を送っていました。あなたがマラルメに何か言おうとして，喉を渇かせ，恥ずかしそうに口ごもるような年齢で，すでに彼はナンシーの代議士に選ばれたのです。純粋な文学とはひとつの肺で呼吸すること〔二兎を追わぬこと〕。あなたとしては，政治が無理なら，音楽か博物学のプロにでもなればよかったのでしょうが，ドングリが南瓜（かぼちゃ）にふくらむことを求めるのはやめましょう。私としては，今のままのあなたを認め，『地の糧』の最初の読書体験に新たに書かれた序文をそのとおり忠実につけ加えます。誓っても私はあなたに〔何も足さず，以前と同じ旨を〕繰り返せと強いていた訳ではありません。

どの作家が書いていたのか分かりませんが，オルレアン公が諸侯を迎えて新たな報告を聞くとき，彼は必ずこう尋ねたそうです，「それでバレスは？」。人は常にバレスにたいし，何か新たな動きや，これまでとは違う思いがけないことを期待していたのです。人が物知りたげな顔つきであなたのことを話題にし，あなたにかんする新しい報せで喜びを得るとき，あなたの存在は続きのあるものになる。〔だからこそ〕「それでジッドは？」，これが発すべき問いになるわけです……。

一時的には。バレスのごとく。「この本を捨て，私のもとを去れ」，あなたはそうナタナエルに忠告しています。しかしおそらく注釈にはなりますが，それは私が自分自身を去ったように私のもとを去れ，だが同時に，私の別の本を手に取れ，ということ。熱狂が冷めたとき，人はあなたの本に気のない対応しかしなくなり，その熱も劣化・衰退の道をたどるような時が来るのでしょうか？ バレスに先だって，フローベールは振動・放熱・継続というタイプの作家でした。フローベールについてあなたは，振動が弱まり，放熱がおさまり，そして後へと続いてゆく，そういう過程を最もよく証言できるお方です。ではバレスは？ 批評は青年たちが彼に負っているものを思い起こさせなければなりません。これまでのところ彼らもさほど無頓着な反応を示していたわけではありません。しかし明日になればどうなることか。ロートレアモンがいる！ あなたの隣人たちは旗を振ってそう唱えています[13]。あなたが告げてくださらなかったら，私もどうなることや

12）テオドール・ジュフロワ（1796-1842）はフランスの哲学者・政治家。19世紀初頭，ヴィクトル・クーザンが主導する折衷派のなかで，心理学的な問題にかんする研究を進展させた。同時代人からはフランス・スピリチュアリスムの代表的心理学者と見なされていた。

13）ロートレアモンを「発見」したブルトンやアラゴン，スーポーらを指しての発言。この

らと思ったところです。

しかし率直に申し上げれば，私はほとんどそのようには思っておりません。ロートレアモンはひとつの制度，文学的な若さの証であり，一般的なものであって個人的なものではないからです。いかにもお考えに賛同する所以ですが，私としては，あれほど長らくデカダンスに身を置いていたテオフィル・ゴーチエが，たてがみも色褪せ，悲痛な口調で「ペトリュス〔・ボレル〕を信じていたと思うと！」と語ったことに悲痛の念を抱いてしまうのです。ロートレアモン，デュカス，マルドロール，これらはみなペトリュスと同義です。あちらのペトリュスは信じず，こちらのペトリュスを信じるといった必要はありません。そうではなく抽象的（イン・アブストラクト）には，ペトリュス〔そのもの〕，ペトリュスというイデアを信じることが大事なのです。若さの今ある姿に決して驚いてはならず，むしろ別の姿であれば，それこそが驚くべきことだと考えねばならない。そういうところに私はあなたの人生と思考様式の最良の部分があるように思います。あなたは現在成立しつつある文学を澄んだ暖かい目で見る術（すべ）をご存じです。バレスに欠けていた感覚を持っておいでなのです。そして私が思うように象徴主義が決して息絶えてはおらず，サン・マルタンの夏の如くであるならば[14]，あなたがそこにあれほどの価値を見出すことはおそらくないでしょうし，結果的には，何ら案ずることなく 1893 年の情況に留まり続けさえすればよかったということになってしまう訳です。

こういった事どもは，私たちがキュヴェルヴィルとトゥールニュのあいだのどこか適当な場所，たとえば我らの友人Ｆたちのところで再会したときに議論しなければなりますまい。その折には，〔昼食を共にする〕午後 1 時の出会いではなく，そこそこのポルト酒が飲める左岸の一隅で（店の当てはありませんが）正午に待ち合わせることにいたしましょう。匆々

アルベール・チボーデ

前年に彼らをはじめ約 40 名の作家・詩人が寄稿し，巻頭にはジッドの序文を掲げていた月刊文芸誌『ル・ディスク・ヴェール』のロートレアモン特集号（“Le Cas Lautréamont”, *Disque vert*, Paris / Bruxelles : René Van den Berg, 1925）を参照。この前後の記述に窺えるように，チボーデはロートレアモンのことをジッドほどには高く評価していない。

14）この「サン・マルタンの夏」（秋の初霜と冬の到来前の温かい晴天の時期）という表現からは，象徴主義はいまだ健在であるが，いずれは勢いを減ずることになるというチボーデの含意もまた同時に読みとれよう。なお，続いて記される「1893 年」は，象徴主義の閉塞性を揶揄した『パリュード』（1895 年），生への回帰，自然への回帰を声高に謳った『地の糧』（1897 年）という結実が示すように，まさにジッドが象徴主義の影響を脱しはじめた時期を指す（友人の画家ポール＝アルベール・ローランスを伴った最初の北アフリカ旅行は同年 10 月からのことであった）。